

加賀見山舊錦繪

頃^{ころ}は延^{えん}文^{ぶん}夏^{なつ}の空^{そら}、鎌^{かま}倉^{くら}の官^{くわん}領^{れい}足^{あし}利^り持^ぢ氏^し卿^{けい}、六^{むつ}浦^{つら}金^{かな}澤^ざ山^{さん}々^々の、獸^{けだ}狩^{ものがり}あるべしとて、今日^{けふ}思^{おも}し
立^たつ朝^{あさ}霞^{がすみ}、召^めしも定^{さだ}めぬ玉^{たま}鉾^{ぼこ}の、草^{くさ}踏^{ふみ}分^わける武^む者^{しや}草^{くさ}鞋^{わらぢ}、出^で立^{たち}は君^{くん}臣^{しん}別^{わか}ちなく、皆^{みな}一^{いち}様^{やう}に怪^{あや}しの
姿^{すがた}、並^{なら}行^ゆく跡^{あと}に勢^{せい}子^この者^{もの}、あらゆる獸^{けだ}荷^{もの}ひ連^つれ、豫^{かね}て構^{かま}への御^お休^{やすみ}所^{ところ}、暫^{しば}しと腰^{こし}を掛^かけらるよ。
和^わ田^だ左^さ衛^ゑ門^{もん}謹^{つし}んで頭^{かしら}を下^さけ、「今日^{けふ}の狩^{かり}倉^{くら}は近^{ちか}頃^{ころ}に覺^{おぼ}えぬ獲^え物^{もの}、君^{きみ}にも嚙^さ御^ご満^{まん}悦^{えつ}」と、申^{まう}上^あぐ
れば持^い氏^し卿^{けい}、愈^{いよく}御^ご機^き嫌^{けん}麗^{うら}しく、いざ折^{をり}よしと紙^{かみ}崎^{ざき}主^{しゅ}膳^{ぜん}、御^{おん}小^さ筒^{とん}盃^えを、取^{とり}敢^あへず捧^こぐれば、和^わ
田^わ左^さ衛^ゑ門^{もん}俱^{とも}々に、打^{うち}混^{こん}じたる主^{しゅ}從^{じよう}が、賤^{いや}しき業^{わざ}を興^{きよう}とする、貴^き人^{じん}ぞいづれ貴^き人^{じん}なる。遙^{はるか}向^{むか}ふの
山^{やま}合^{あひ}より、勢^{せい}子^こに追^おはれし小^こ鹿^{しか}一^{いつ}匹^{びき}、狩^{かり}出^ださるれば持^い氏^し卿^{けい}、「ソレ討^{うち}留^{りゆう}めよ」の御^ご誕^{たん}の下^{した}、紙^し崎^{ざき}
はつと立^{たち}上^あり、「アレ討^{うち}留^{りゆう}めよ源^{げん}藏^{ざう}」と、あせれどハツト平^{へい}伏^{ふく}し、猶^{いふ}豫^よなす内^{うち}一^{いつ}散^{さん}に、子^こ鹿^{しか}は還^{かへ}
れ走^{はし}り行^ゆく。持^い氏^し卿^{けい}御^ご機^き嫌^{けん}損^{そん}じ、「イヤコリヤ」主^{しゅ}膳^{ぜん}、彼^き奴^{やつ}如^{ごと}何^{いか}なる所^{しよ}存^{ぞん}あつて我^{わが}詞^{ことば}を用^{もち}ひ
ず、子^こ鹿^{しか}を遁^{にが}せし其^{その}仔^{さい}細^{さい}、具^つに尋^{たづ}問^{もん}ふべし」と、御^み氣^け色^{しき}惡^{あく}しくのたまへば、紙^し崎^{ざき}も不^ふ審^{しん}をなし、

「末々の御奉公とは云ひながら、君恩に二つはなし。ヤア／＼下郎め、御意を背き子鹿を射ざりし申譯仕れ」と、席を打つて尋ねれば、ハットばかりに恐れ入つて居たりしが、稍あつて顔を上げ、「私事元は獵人、鐵炮達者とお聞きに達し、御足輕組へ召抱へられ、則ち今日も勢子の其中へお雇に選ばれ、只今子鹿見遁せし御咎、恐れながら一通り申上げん。私儀幼少より殺生を好み候へども、親たる者申置きしは、畜類ながらも生ある物、親を討たば子を助け、子を討たば親を助け、親子共討つ時は、根を斷つて葉を枯す不仁の至と、亡き親めが常々戒め、只今まで助け來りし所、今日只今恐れ多き君命とは申せども、止む事を得ず御説を背きし身の罪科、遁るゝに所なし。御咎は覺悟の上、イザ御政法御行ひ下さるべし」と惡びれず、恐れ入つて申すにぞ、持氏卿感心まし／＼、「下郎には似合はぬ心底、奥床し頼もし。鳥類畜類も恩愛の至極の心は同じ、父が詞の節を守つて命を背き、身の咎を顧みざる仁義の一言、感ずるに猶餘りあり。イヤ何紙崎、歸館なさば源藏に、早く褒美得させよ紙崎」と、仰にハット主膳がお請、面目餘る源藏が、悦びいはん方もなし。折もこそあれ遠見の侍、御前に頭を下け、「京都將軍家の御執事細川殿、伊豆箱根二所權現へ御代參の歸りがけ、君の御遊を聞し召され、此狩場へ御入あつて、御内談の趣ある由、早速に御注進」と、言上申し立歸る。和田の左衛門取敢へず、「細

川殿には御一門同然なれど、御遊の装束禮服に改め、御對面あるべし」と、申し上ぐれば持氏卿、實尤と諸士引連れ、「イヤナニ源藏には休息」と、仰も重く幔幕を、絞らせてこそ入り給ふ。程もあらせず此方より、行列美々しく出来るは、京都の執事細川頼之、御入なりと道芝に、各足を止むれば、幔幕の内より持氏卿を初とし、續いて出づる和田左衛門紙崎主膳、威儀を正して出迎へは、悠々として細川頼之、狩屋の床の設けの座、互の禮儀ことをはり、「此度義詮公御代参として、伊豆箱根に幣を納め、其道々噂を聞くに、先達て亡びたる赤松滿祐が殘黨、邊鄙の在郷に隠れ住み、豫て事を計らふ由、下々の沙汰大方ならず。正しく君は義詮公の御連枝、鎌倉の柱石たれば、此事申上けん爲、道を過つて此狩場へ、態參上致せし」と、申上ぐれば持氏卿、「先達て貴所の御息女操姫を、我弟縫之介に娶せよと、則ち養子と定められ、疾くより我方へ引取りしが、内縁ある此持氏、外ならず思召し、御内意の親切忝なし」と述べ給へば、此方も夫と打寛ぎ、「我娘操ごと、貴君へ差上げし事なれば、御心任せたるべけれど、誑意の上は遠からぬ中、婚姻の儀式御調へ給はるべし」と、親子の道の慈しみ、いづれ劣りはなかりけり。「オ、御尤なる御仰、近々に日柄を選び、弟が婚姻調へ申さん、御安心下されよ」と、事を分けたる御詞、頼之も笑を開き、「此上は赤松が殘黨の、其逆徒を治め給ふが

肝要たり」「ア、イヤ、其儀は豫て持氏思慮を運らし置きし所、斯く申す和田左衛門紙崎主膳控へあれば、日を待たず切鎖めん、御心安かれ」と、申上ぐれば頼之卿、「オ、各の忠勤も悉く言上申すべし。イザヤ歸館」と立ち給ふ、薰も深き武門の袖、花を比ぶる禮儀の形、大將はじめ並居る諸士、見送る行列小松原、綠榮ゆる君が代の、御遊の御狩勇しく、八十氏川の末廣き、譽ぞ高き三重久方の。

第 二

五月半の花菖蒲、爰も名に負ふ東路や、梅澤村に足休め、茶店女房の器量よし、よしや葦簀の茶の花香、色を含みし優姿、折柄來る足輕の、源藏と見るよりも、「オ、こちの人、何としてござんした」「ホ、女房共、日和がよさに店出したな。若殿のナ、ソレ御内用、今日一日お隙を貰ひ、内へ往て見れば、店出してゐると聞いた故、直に爰へ出掛けて來た」と、聞くにお來は會釋して、此間は鹿狩で御用も繁く、休まんす隙もあるまい、今日ゆるりと休まんせ。コレ出花一つ」と汲んで出す、夫婦が中の濃茶なり。世を勘ねて、浮きつ沈みつ飄箆の、流れ渡りの畑介が、ぶらく爰へ來かよりて、互に夫と顔見合せ、「ホオウ畑介様、此間はお物遠、ア何時が

す。ヤアほんに久振ぢや、氣晴しに酒なと買うて來うかいなア」「ヤソレハ御馳走、ナコレ、と
 てももの事にソレ諸白を」「アイ、そんなら買うて來やんせう、徳利は借りて戻らう」と、夫に一
 つもろはくの、酒屋をさして急ぎ行く。源藏は後打ながめ、「酒買うて來る其内に、久し振ぢや、
 産神へ參つて來う」と獨言、隣村へと出でて行く。世を憂しと、浮世の中を並々の、身には
 思ひの花姿、娘と見えて十八九、形も所體もしほたれし、生地の儘なる美しさ。「コレ申し父様、
 今日初立の願解き、モウ此様な嬉しい事はないはいな」と、親を思ひの優娘、心も對の容貌、
 聞く親の身は猶更に、「オウ嬉しい道理々々、常から其方の孝行、私が又今度の大病、生藥師
 の立伯殿も、七を投けた其所を、我身の精力、神佛の力ばかりで療治仕果せ、今日初立の神參
 りも、皆其方の介抱の蔭、其惠冥利とやらでも、何卒我出世の行末、祈るより外望とてはない。
 親の慾目と我ながら思へど、器量抑立どこへ出しても屹とした御奉公人、見る影もない其形さ
 せ、へエ、口惜しい、無念なはいやい。貧の病は藥もなく、助けてくれる佛神の、力にも及ば
 ぬか」と、臉を洩るゝ涙聲、聞くに娘も悲しさを、見せじと作る空笑顔、「アノ父様の譯もな
 い、愚痴らしい事いはしやんす。世の中の浮き沈み、昨日に代る今日の出世は、世にたんとあ
 る事なりや、氣をめいらした物でもない」と、親の心を慰むる、心遣の眼に涙、「さうぢやく、

能ういうてくれたなア。サアわさくと氣を活かして、明神様へお禮申し、我が身が出世奉
公口も、懇にお願ひ申す。サアく「おぢや」と親子共、いそくとして行く後へ、「オ、イ
オ、イ十内殿、浪人殿」と、うなり呼はるどす聲に、ハット思へどそ知らぬ體、行過ぎる間に
すたくと、息を切つて、「コレ十内、イヤ爰なするや先生、其耳をかつ浚へて、今いふ事能
う臍の下へ聞いておくれ、先づ斯うぢやは。お身様が長々の御浪人できつちく、其中へ貴
様の大病、お娘一人が立つたり居たり、餘り見る目が氣の毒故に、此鷺の善六、世間が並の
分相を減らして、五兩一分に二割の禮金、無利息のやうな安い金、人參代の五兩の金、元利
積つて金十兩、おがら達の貴様の内へ用立つた此善六、宛のない金は借さねば、コレ此お初を
我等が目當、コレ十内殿、今日初立の其祝儀に、掣定の祝ひ事、サア一つ打ちませう、打つ
て下され親仁殿」と、髭撫上げてへし付ける。傍にはハット悲しさの、何と詞もなき入る
娘。十内は膝すり寄せ、「イヤナニ善六、借りた金は借りた金、娘は娘格別の事、人參代の
五兩の金で、娘の初を買切りにするの。出世抱へた大事の娘、ならぬ事置いてくれ」と、
老のいらくらずつかりと、いうては見れど命金、借りたは定のおろく涙。ソリヤ喧嘩よ
と人立の、見る目もさすが娘氣の、泣くより外の事ぞなき。善六は大息つき、「テモ扱も見掛

に似合はぬ肝太な親仁めぢやわいやい。死ぬる所を助けてやつて、まだ其上に恥面かよされ、モウ夫で云分あるまい。是からは此方も意地づく、小判十兩ほいとはさせぬ、お代官へ訴へて、お定りの手錠掛けさせ、夫で濟まにや願うて水牢、待つてをれ」と斷出す。「ナウ悲しや」と娘のお初、取付き縋り泣沈み、「お前様の仰しやる事、無理とはさらく存じませぬ、父様の大病で、今日か明日と思う時は、假令此の身を賣つてなりとも、取留めたいと思つた所、お貸しなされた五兩の金、千萬兩の金よりも嬉しかつた其御恩、まだ其上に不束な、私の面倒見やうとある、お志の厚いお前、父様は昔形氣、當人の私が合點すりや、どうなりとなるわいな」と、含む涙の流し目は、泣くよりもなほ哀れなり。善六は身中也ぐにやぐ、臍の緒切つて初物の、色身臺白に指打ちくはへ、「アノ肝心のそもじが夫なりや、親父殿はわしが親、假へ此身は天秤棒で打叩きに逢ふとても、何の其厭はうぞい、善は急げぢや」と、引立てる腕もぎ放し、胸ぐら取つて「ヤイ善六、年端もゆかぬ子心にも、此親へ孝行と思やこそ、そもやそも我がやうな山猿と、夫婦となろといふわいやい。高が五兩で繫いだ命、俺も武士ぢや、今戻す金の代りに命をやれば、帳面はさらりと消ゆる」と、云ひも敢へず刀を腹、「ナウ悲しや」と娘のお初、縋り付いて止むるにぞ、「放せ」「放さじ」せり合ふ後、人立つ中

を押分けて、商人風のじんと親仁、十内が手をきつと押留め、「私や往來の者でござんすが、見まする所御浪人の、いかう御難儀な節と見えます。殊に又御病後とやら、お互に年寄は、只さへ家が古なつてりや、藥力も廻り兼ねる、其命を僅な金で死なうとは、ソリヤ御籠相、お近付ではなけれども、娘御のアノ孝行、貞節な今の様子、御笑止に存じます。持合せた金子十兩、コレお貸し申す、御出世の上御返しなされ」と、詞と共に懷中より、取出したる小判十兩、「サア御返金なされよ」と、突付けられて親子は只、夢見し心地嬉しさの、何にたとへん様はなし。十内は地にひれ伏し、「馴染好みもなきお方、御恩の金も此場の難儀、御辭退なしに拜借」と、ずつと立つて、「コレ善六、借用の金十兩、返済すれば言分有るまい。借用證文イザ返せ」と、投付けられて善六が、工面の違ふ膨れ面、不承々に懷より、一通を取出し、「ソレ借證文返してやります。ハテ扱物には變のある物、見ず知らずの通り違ひに、金十兩貸してやるとは、世には又様々な酔狂者もあるもの」と、金請取つて懷手、のつかくと出でて行く。跡に親子は詞さへ、涙に噎び手を支へ、「只今も申せし通り、見ず知らずの我々親子、大難を救ひ給はりし、御恩は何と報すべき。ヤイお初よ、俱々にお禮申せ」と親も子も、骨に徹えし悦び涙、只伏拜むばかりなり。「ア、コレ、其様に何のマア、お禮に及ばぬ事、先何か差置いて

是を御縁、お近付になりませう。我等事は船ヶ谷の米問屋、坂間傳兵衛と云ひます者、親の代
 から仕合よく、今鎌倉の分限帳にも、乗つてある我等が身代、自慢ではござらぬが、十兩や二
 十兩お取替へ申したとて、さして困る身分でもなし。私が娘も三年以前、お出入屋敷足利様の
 奥御殿へ、御奉公に出ましたが、お氣に入つて今お中老に出世しました。子を持つた身は相互
 に、娘御の孝行なには、私は泣いてゐましたわいの。不躰なことながら、此體でござつては、奉
 公口の出世も出来まい、慮外ながら一二年、私が娘にお預けなされ、勤方見習うたなら、私が
 世話して屹とした、御奉公人に仕立てて見ませう。入らぬ世話と思はしやろが、アノ娘御の
 孝行な心に、縁でがないとしようなつて、胸一杯をいうて見ます」と、奥底もなき眞實は、涙
 に夫と見えにけり。十内は只伏拜み、嬉し涙の隙よりも、威儀改めて兩手を支へ、「重々厚き
 御恩の程、娘が身の上まで、残る方なき御恵み、此方より願うてなりとも、御恩報じの御奉公、
 望むところの幸ひなれば」「ム、スリヤ得心でござりますが、マア早速の得心で、私もいかう
 嬉しうござる。日柄選んで些とも早う」と、さくい詞に娘のお初、「旦那様のお情、死んでも忘れ
 置きませぬ」と、いふも恩義の初一念、さらばとばかりそこく、に、東西へこそ別れ行く。端
 手な取形抱へ帶、ぬめり姿も白統の、古今帽子もしをらしく、道それ者の道芝は、手越の宿の

太夫職、禿ども引連れて、茶店の元に歩み来る。立歸る源藏夫と見て、「是はく道芝様、思ひも寄らぬコリヤ何處へ」と、尋ねられて飛立つ思ひ、源藏が胸ぐら駈取り、「オ、好い所で逢ひました、エ、お前は聞えぬお人、縫之介様も此頃は、曲輪へお越しなない故に、お前頼んだ日文の返事、なぜ取つては下さんせぬ。逢ひたい見たい願参り、日頃念する長谷寺の、觀音様へと志し、頼みに思つたお前まで、聞えぬ仕方胸慾」と、恨み詞に、「サ、尤ぢや尤ぢや、是には段々咄しのある事、コリヤ繁野、其人達を連立ちて、そこら一歩歩いて來い」「アイアイそんなら太夫様、向ふの堤で遊んできやんしよ。サアくごんせ」と打連れて、足早にこそ急ぎゆく。道芝は心急ぎ、「咄したい其譯を、早う聞かして下さんせ」と、せり立てられて、「サ、咄さねばならぬ譯といふは、此度京都義詮公の上意として、細川家の姫君と御祝言なさるゝ筈」と、聞くより吃驚り、「エ、そんなら御姫様と御祝言なさるゝかえ、アノ祝言を。エエ腹の立つく、コリヤ何せうぞいなく。ア、コレく何せうぞいなく」「サ、サマア氣を緊めて聞いたがよいわいの。併し若殿様はお前に義理を立て御承引なき故に、兄君持氏卿の御立腹、やつさもつさの其最中、此譯の納るまでは、曲輪通ひの御遠慮」と聞くに猶更戀の意地、「エ、縫様も張の弱い、そこをぐつと押したがよいわいな。殿様と私が中は、お

前も知つてござんす通り、突出しの初より、互に變るな變らじと、云交したる二人が中、祝言
 さすこと私やいやく、縫様のお傍に居たい、連れて往て下さんせ」と、粹な育ちも色の道、愚
 痴の涙ぞ誠なり。「オ、腹の立つは道理ぢやく、さりながら、お前を館へ連立つては、夫こそ
 は亂騒ぎ、コレ今暫し辛抱なされ」「イエく、斯ういう内も氣遣な、早う行きたい、サアく連
 れて往て下さんせ、是非にく」と氣を苛ち、里氣の儘の疳癪は、留めかねたる折からに、お
 來はとつかは戻りがけ、見るより吃驚、徳利はつたり取落し、二人を押分け源藏を引立て、「コ
 リヤ我をれ、俺を酒屋へ出し抜いて、アノ女とこつてりちんく、エ、マ憎體らしい男面」と、
 叩いつ喚く間違悋氣、源藏をかしく、「エ、何吐かす、コリヤやい、アノ女中は」と、いふを打
 消し、「イヤくくく」古手な云譯此方や聞かぬ、マ厚皮な女面、どんなお顔ぢや見てやらう」と、
 背けし顔を差覗き、「どうやらこな様は見たやうな」「私もお前は見たやうな」と、いふにお來は
 心付き、「もし稚名はお宮とは云はぬかえ」「アイ宮と申しましたが、稚名を知つてござんすお
 前は」「オ、コレ姉のお來ぢやはいの」「エ、姉様か」「妹か、ヤレ懷しやく」と、取付き縫
 り姉妹は、嬉し涙にくれ居たる。源藏は不審晴れず、「コリヤ女房、太夫様を妹といふ子細
 は何ぢやぞい」「サウ様子知らしやんせねば合點が行くまい、此お宮が九つの年、私が大病の物

入、父様が此子をば、手越の宿へ賣らしやんして、今の名は道芝と、其名をば聞いたれども、逢ふ事ならぬ曲輪の掟、懐しう思うてゐたが、久しう見ぬ間に、オ、好い太夫様になりやつたなう」と、いふもおろく涙聲、さすが親身の挨拶に、道芝も打萎れ、「思ひがけなき御目もじ、父様にも御息災なと、餘所ながら聞きました。お前も御無事で嬉しうござんす。源藏様を私が妹婿とは、知らぬ事とて澤山さうに、堪忍して下さいませ」アイヤ／＼互に知らねば其咎其咎、道理で面ざしが似たと思うた。若殿と云交したお傾城が、賤しい女房の妹といふ事が、お耳へ入つては爲にならぬ、必ず此事沙汰は無用「アイ夫は互に隠して濟ますが、濟まぬは祝言、縫之介様が眞實お姫様を嫌はしやんすが定ならば、私を館へ連れて往て、お傍に置いて下さんせ。さうない内は何程でも、疑ひは晴れませぬ。姉様俱々宜いやうに、頼みます」と涙含む、眞實見えて道理なり。「ウ、其方の身の出世ぢや物、何の如才があるぞいの。コレ源藏殿、何卒思案はないかいな」と、いふに暫く差俯き、「ハテ其様に疑はしくば、お館へ入れる工夫、萬事は私が胸にある。若殿と蹀し合せ、明日に迎ひに行く程に、さう思うて待つたがよい」と、聞いて心もいそぐと、「アイ／＼、そんなら曲輪へ戻つて待つてゐるぞえ。繁野々々」と呼ぶ聲に、アイと返事も長嘸、男も俱に立戻れば、「イヤ女房共、畑介様が嘸ぞ待つてござら

う、俺おれやちよつと往いて來こようかい。ヤ道芝みちしば、是これで別わかれ申まをしまする」「そんなら必かならず姉様あねさま、ではない女中様おんなぢやうさま、モウお暇いさま申まをしまする」「そんならモウお歸かへりか、随分健ずいぶんで煩わづらはぬ様やうにお勤つとめ」おさ
らばさらばと盡つきせぬ名残なごり、互たがひに見返みかへり見送みおくりて、手越てこしの里さとへ返かへりけり。かゝる折せりから持氏卿しきやうぢ、
忍しのびの御遊ぎやうを輕々かるくと、御乗物おんのもつものに召めし給たまひ、道みちを拂はらうて出いで來きたる。お來らいはうつとり近習きんじゆの侍さむらひ「ヤ
ア女下おんながれく」「はいく私こつちは此茶店ちやんてんの者もの、殿様おんさまの御通おとほりも存ぞんじませず、不調法ふてうはふの段だんは眞平御まへいらお
赦ゆるされて下くださりませ」「イヤサお通とおりのお目障めざはり、片寄かたよれ退すきれ」と引立ひきたつる。「ヤアく者共暫ものどもしほら
く待まちて、其女そのにようじに用事ようじあり」と、仰おほせにハツと近習きんじゆの武士ぶし、威儀ゐぎを正ただして控ひかへる。持氏殿しきやうぢは徐々しゆくく
と、床几しやうぎを假かりの御設おんまうけ、悠々いゆうくと御腰掛おんこしかり、お來らいが容儀ようぎに愛めでさせ給たまひ、「コリヤく女おんな、其方そちや此
茶店ちやんてんの者ものよな、かゝるいぶせき所に似合にあはぬ、ハテ艶あてやかなる經致きやうちやう、某それがしも不思議ふしぎの緣えん、其方そちが手
づから茶ちやを持もてやい」「ソレく銀のお茶碗ちやわん」「コリヤく其茶碗そのちやわんでは氣きが替かはらぬ、やはり茶店ちやんてん
の其茶碗そのちやわん、早はやうく」とありければ、「夫それはや早く持もてく」「ハツと恐おそれて立上たちあり、氣きもわくく」と
涌わく茶釜ちやがま、嗜茶碗しやわん清水しみず燒やき、茶臺ちやだいに乗のせて恐おつく、面映おもはゆけにぞ差出さしたす。茶碗取上ちやわんとりあげ持氏殿しきやうぢ、御機嫌ごきげん
よく打笑うちわらみ給たまひ、「ホ、天晴あつはれなる茶ちやの香氣かうき、ハテ俵遠目たわはるゑめに見るよりも、猶美なほうつくしき此花香このはなか、ヤソレ
乗物のりものの歌書かしよ持もて」「畏かしこまて近習きんじゆの武士ぶし、取出とりだし差上さしあぐれば、挟はさみし枝折しをりを取とらせ給たまひ、「古いにしへ西さい

行法師が芳野にて、花の名所を求めんと、幾重の山に分入りしに、道を尋ねる人もなく、案じ煩ふ道芝の、木草に付けし白紙を慕ひ、花の名所を得たりし時、芳野山、去年の折枝の道かへて、まだ見ぬ方の花を尋ねん、夫より是を折枝と號く。今某が名も同じ、此花の姿に迷ふ道しるべの此枝折、ナコリヤ、サ合點が行たか」と古事を、花に擬へし御戯れ、差出し給へば、お來は夫と推量し、ハット驚き恐れ入り、「ハア、勿體ない恐れ多い、賤しい私がお茶の給仕、御褒美のお詞、又賤しい此花お手折りなされんとの御意、冥加ないと申しませうか、有難うは存じますれど、此花も主ある梢、折取ることば憚りながら、お赦されて下さりませ」と、恐れ入つたる詞の端、「ム、扱は其花には主あるとな。たとへ花守あるにもせよ、某が心の儘、根引にし館へ移し、詠めるは易けれども、木折にせんは無下なるべし。サとくと思案し返歌せよ」と、仰せに何とゆふひ影、やゝ時移る其所へ、紙崎主膳しづくと、家來引具し謹しんで、「今日京都入り上意の趣出來、御迎ひの爲參上仕る」「ホオ、紙崎大儀々々。ヤナニ女、必ずく返歌を待つ」と、御乗物に召し給へば、近習若黨備へを立て、徐々と歩む後備へ、紙崎は訝しく、女に屹度目を付けて、心の要緊めて行く、扇が谷のお館へ、御供申し急ぎゆく。お來は跡を詠めやり、思はずほつと溜息つき、「テモ扱も悲哀な事、そして辛氣な物を貰うた」と、屈托

半^{なか}へ夫^{おつと}の源藏^{げんざう}、戻^{もど}りかゝつて一思案^{ひしあん}。「オ、好^よい所^{ところ}へ戻^{もど}らんした、コレマア聞いて下^{くだ}さんせ」
 「オ、様子^{やうす}は皆知^{みなし}つてゐる。ヤ女房共^{にやうぼうども}、其方^{そなた}に談合^{だんがふ}する事がある、聞^きいてくれるか」「エ、改^{あらたま}
 つた事云^いはしやんす、マア何^{なん}でござんすえ」「イヤ少し思^{おも}ふ子細^{しさい}あれば、暫^{しばらく}の中親里^{うちおやざと}へ往^いんで
 たも」「エ、夫^{そり}やマア如何^{どう}して、其譯^{そのわけ}は」「サ、様子云^{やうすい}はねば驚^{おどろ}きは尤^{もつとも}、知^しりやる通^{とほ}り足輕^{あしがらぐらう}位^{くらい}
 の切^{きり}みでは、いつかな出世^{しゆつせ}の時^{とき}は得^えぬ。心當^{こころあたり}は、都^{みやこ}へ立越^{たちこ}え、奉公^{ほうこう}に有付^{ありつ}けば、其時^{そのとき}こそ立^{りつ}
 身出^{しんしゆつせ}世^せ、聞^き分^わけて給^たも女房^{にやうぼう}」と、思^{おも}ひ込^こんだる夫^{おつと}の顔^{かほ}、譯^{わけ}を知らねば氣^きにかゝり、「ム、コリ
 ヤ如何^{どう}でも深^{ふか}い心入^{こころい}れ、コレ女房^{にやうぼう}の私^{わし}に何^{なに}に遠慮^{えんりょ}、なぜ言^いうては下^{くだ}さんせぬ」「ハテ其譯^{そのわけ}は後^{あと}
 で知^しれる、得^え心^{こころ}して早^{はや}う去^いね」「イヤ」譯^{わけ}を聞^きかねば何程^{なんば}でも、去^いぬる事は私^{わし}やいやく、様^{やう}
 子^こを聞^きかして下^{くだ}さんせ」と、縋^{すが}り歎^{なげ}けば、「エ、聞^き分^わけのない、夫^{おつと}が出世^{しゆつせ}の妨^{さまたけ}せば、夫婦^{ふうふ}の縁^{えん}を
 切^きらうか」「サ、夫^{それ}は」「得^え心^{こころ}したら早^{はや}う去^いね」ハア、はつとばかりに胸迫^{むねせま}り、暫^{しばらく}し涙^{なみだ}にくれけ
 るが、良^やあつて心付^{こころづ}き、オ、夫^{それ}よ、思^{おも}ひ廻^{まは}せば廻^{まは}す程^{ほど}、私^{わたし}は爰^{こゝ}にゐられぬ品^{しな}、知^しつて夫^{おつと}がそ
 れぞとも、云^いはれぬ譯^{わけ}ゆる親里^{おやざと}へ、身^みを隠^{かく}せとの事^{こと}なるかと、いはす語^{かた}らず心^{こころ}で納^なめ、「成程^{なるほど}
 是^{こゝ}から直^{すな}に親里^{おやざと}へ往^いにまする、あり付^つき次第^{しだい}無事^{むじ}の便^{たよ}りを聞^きかして下^{くだ}さんせ」「オ、能^よう合點^{がてん}
 した、委細^{ゐさい}は早速^{さつそく}知^しらせの狀^{じやう}」「必^{かならず}待^{まち}つて居^ゐますぞえ」「随分^{ずぶん}健^{けん}めで」「お達者^{たつしや}で」と、互^{たがひ}に包^つ

む胸と胸、明けていはれぬ暇乞、涙にくれの鐘の聲、空に知られぬ五月雨や、泣別れてぞ三重行
くすゑの。

第三

爰に鎌倉の守護職、管領足利持氏卿、三老と俱に、民の裁斷聞こし召されん其爲に、問注所
に御入りあれば、相詰める人々には、老臣仁木將監、和田の左衛門紙崎主膳、其外昵近御傍衆、
威儀嚴重に見えにけり。將監人々に打向ひ、「先達て京都よりの嚴命下り、細川家の御息女操
姫様を、我君の御舍弟縫之介様に云號け、則ち御養子分になされ、疾くより館へ入らせ給ひ、
かやう祝言甚だ延引。よくく聞けば縫之介様、當所手越の傾城にうッ惚れ、姻禮御承引なし
と一家中の取沙汰、何にもせよ、取急ぎ御祝言調はずば、上意を背くの恐れあるべし」と、苦
り切つて申すにぞ、紙崎は差寄つて、「何れにも評議の上、先は御前を伺はん」と、皆打連れ
て奥の間へ、徐々立つて入りにけり。廣間もひつそり夕日影、奥より忙しき袴の音、大將の御
舍弟縫之介、何かは知らず小姓が胸先、引立てて突飛し、「今日目見えした小姓の噂、よくく
見れば其方、コリヤヤイ道芝、形を窺して入込んだは、此館に云交した男があるに極つた。サ

ア其名を言へく。此縫之介より外、枕は交す者はないと、能う偽をいうたな。放埒者徒者、
 人外め、手打にする覺悟せい」と、腹立聲に道芝は、恨めしげに顔振上げ、「エ、殿様胴慾な、
 過ぎし頃より御館に、免れがたき事ありと、只た一度の文使ひ、夫から頓と便なく、逢はぬ日
 數も七夜さ十夜さ、待明かしても晝さへ暗き胸の中、逢はれぬ事に定まらば、いつそ死にたい
 お手打に、遇ふがせめての思ひ出」と、身を摺寄せて恨言、眞實見えていざらしき。「スリヤ
 俺に逢ふばかりで、小姓姿に扮したか」「アイ、何時も御供の源藏殿に打明けて頼んだら、此
 様に男に仕立て、目見えとやら嘘いうて、私や爰へ來たわいな。お前に逢ひたいばかりで、
 女のあられぬ此姿、思ひやつて下さんせ」と、抱付いたる涙には、いかな大名高家でも、ほろ
 りとさせる睦じさ、哀は後に知られけり。最前より物陰に、將監が窺ふとは、夢にも現縫之介、
 「まうよいく、夫で疑が頓と晴れた。是から居間へ連れて往て、此間から懈怠した、用がた
 んと支へてある」と、手を引連れて立上る。奥の方より操姫、立出で給へば二人は恟り、俄に
 行儀押繕ひ、「ホオ、是はく操姫殿、何用あつて爰へ御出」「ハイ、いや申し殿様、あれに居
 るは見付けぬ小姓、御召使でござりますか」「オ、夫々、アレハ今日目見した新參者ぢや。コリ
 ヤそこに居る新參の小姓よ、ナ、こりや小姓よ」「小姓ぢやわいの」「ム、貴君のお傍使ひなら、

何の遠慮に及ばぬこと。イヤ縫之介様、今更申すに及ばねど、義詮様の仰には、お前と私は云
號、疾うから此館へ来て、朝夕お傍に暮せども、遂に優しいお詞は、露ほど受けぬ情なさ。愚
痴な愚鈍な身を悔み、よるべ初瀬の神祈り、肝腎儀式の新枕、いつ祝言がある事やら、月日を
指にをりくは、泣いて暮してをります」と、恨涙に暮れ給ふ。「そんならあなたが云號
のお姫様、疾うから来てござるかえ、そんな事であらうと思うた、エ、餘りぢやく、能う私
に隠さんした、エ、腹の立つく」「コリヤく新參の小姓、何を謔言」「イエくくく新參の
小姓ぢやない、お前と深いひかはした、道芝といふ傾城ぢや、此方やだんないく。サアサ
ア曲輪へござんせ」と、縫之介の手を取れば、「イヤくそんな慮外はさせまい」と、姫も取付
く諸葛、彼方此方に引き纏ふ、後に立聽く仁木將監、「操姫様御待ちあれ」と、聲に恟り三人
は、手持無沙汰に見えにけり。「コレハく縫之介様、此將監には何事もお隠しなさるに及び
ませぬ、此お小姓は私預り、品宜しく計らひます。お姫様と諸共に、奥の御殿にお出でなされ」
「アイヤ斯うなつてはモウ隠さぬ、此姫を嫌ひはせねど」「サアく合點してをります」「夫で
も祝言はならぬく」「是は扱何とお聞きなさるゝぞ、おいやならいやに致しますてや」「そん
なら道芝は其方にきつと預けたぞ」「御安堵なされ先々奥へ、早うく」と進められ、心は先

へ道芝が、後にといふを目で知らせ、是非なく奥へ縫之介、姫諸共に入り給ふ。廊下の方より足音して、持氏卿御出さふと呼はれば、小姓を側に將監は、禮儀正しく控ゆれば、立出で給ふ持氏卿、寛仁柔和の御骨柄、續いて出づる和田紙崎、御側小姓が御酒盃、中央の間に座し給へば、仁木將監取敢へず、「先刻仰付けられし新參の此小姓、とくと窺ひ候處、姿を扮せし女にて候」と、申上ぐれば一座の恟り、和田左衛門ツツと寄り、「女を男の姿に扮し、御館へ入るゝこと怪しみの第一、屹と吟味遂ぐべき事」「アイヤ、將監そこらは脱りませぬ。今朝入込みし此小姓、合點行かじと思ふより、態と奥へ通せしが、御舍弟縫之介様を戀慕ふ此女、さるに依て云號を嫌ひなさるゝ、若殿の其病の根は此小姓」「アイヤ將監殿お待ちなされ、姫をお嫌ひなさるゝ事聞きも及ばぬ」「アイヤ龔相は申さぬ、元來物を誂ひ飾るは、此將監嫌ひ物、ありの儘に申すが實儀、扱々お笑し千萬」と、芥搔出す舌先に、根ざしありとぞ見えにけり。持氏卿氣色を正し、「弟縫之介事は追つて沙汰に及ぶべし。最前遠目に見たる小姓、ソレ目通りへ」と仰の中、アイとおめたる氣色なく、御前へ居直れば、「コリヤ女面を上げよ」と、ためつすがめつ持氏卿、「其方は梅澤の茶屋で逢うたる女ではないか、ハテ麗しい。まだ見ぬ花を尋ねんと、古歌を書いたる文の枝折覺えつらん」「オ、殿様の何を云はしやんすやら、

そんな覺おぼえはないわいな」「ム、小姓こしやうに成つて入込みしは、其方が物好か」「テモいろ／＼な事
問ふお方かたぢや、縫様ぬひさまに逢ひたさに、足輕あしがらの源藏殿と連立つて來たわいな」「何足輕なにあしがらの源藏が
連來りし女をんなとや、將監せんみに吟味ぎんみさせん、其源藏を呼出せ、早く／＼とのたまへば、ハツと近
習じゆは立上り、間毎まごごに傳ふる聲々に、まだ目にも見ぬ奥御殿おくごてん、初めて上る縁側傳えんがはづたひ、恐れ入つ
て平伏へいふくす。將監せんみ聲かけ、「ヤア／＼源藏、今呼出したは別儀べつぎでない、是に居る小姓、見覺え
て居ようがな。イヤサ女を小姓の姿すがたに變し、お館へ入れたるは、其方が所爲しわざであらうがな」
「ハア、成程なるほど、今朝こんてうあの女中が途中で私を呼びかけ、此お館やかたの殿様に逢ひに行くのぢや、
連れて往てくれいとある。此御殿このごてんの殿様とあれば御前様ごぜんさま、何憚なにはづかる事はなけれど、端手はでな傾城けいせいの
姿で、御殿へ通つたと噂うはさがあつては、何やら惡さうな事ぢやと存じ、お小姓の姿すがたに扮し、御目
見えにして這入はいらせました。下郎ひらうの私、味行あぢやつたと存じましたが、不調法ふてうはふになりましたら、憚
ながら幾重いくへにも、御免ごめんを願ひ奉る」と、恐入おそれいつてぞ見えにけり。持氏卿打笑み給ひ、「傾城が戀
慕したふを、此持氏こしやうと心得、世上せじやうの聞えを思ふは神妙しんべう、見所みころのある下郎、小姓ども源藏に酒をくれ
よ、それ／＼とのたまへば、銚子てうし盃さかづき三寶さんぼうを縁側えんがはづたに差置いて、「有難ありがたき御意ごいの盃頂戴さかづきちやうだい致せ」「ハ
ハア、イヤモ有難ありがたいと申さうか、冥加みやがに餘る御意ごいの程、給へまするは猶慮なほりよくわい外」と、三寶さんぼうの御

盃さかづき、押戴おしいたきく、懷ふせろへ納をさむれば、持氏こ御機嫌きげん麗うるはしく、「ヤアく將監せんてく、先刻申付けたる事、いよいよ評議ひやうぎ糺ただすべし。又源藏げんざうには用事ようじあれば、暫しばらく夫それに控ひかゆべし」と、御錠ごぢやうの下もとに次つぎの間より、遠侍とほざせ罷り出で、「北きたの方より御使おんつかひとして、局役つばねやく岩藤中老尾上いはふぢうちうらうかのへ、お次つぎまで參上さんじやう、通とほし申し候はんや」と、伺うかへば持氏卿こ、「ホ、才兩人りやうにんふたり共是へ通とほせ、イザ疾さくく」と仰おほせに連れ、廳やぐてかくとぞ云いひつぐる。花の香かの、隙洩ひまもる風かぜに送おくられて、徐々しづく出づる長廊下ながらうか、遙下はるかりて手てを支つかへ、「北の方きた様の御口上ごこうじやう、今日は問注所もんぢうしよへ御入おいり遊あそばし、御政道ごせいだうの御評議ごひやうぎはある由よし、嘸さあかしお氣詰きづめ、右御伺みぎおいひととして局岩藤中老尾上つばねいはふぢうちうらうかのへ參上さんじやう」と披露あそにつれ、持氏卿こも御悦喜ごえきましく、「オ、兩人共大儀たいぎ大儀、二人の使者しやの變もてなしに、此傾城このけいせいは奥へ連れゆき、花月くわげつの間で一獻酌いつこんくまう」「アイ縫様いづみのござる所へ、連れて往いて下さんせ」と、憚はにかる色も中々に、小姓姿せうしやうをほらくと、我君わがみに引添ひきそへば、諸士しよは頭かしらを下くだし簾すずや、帳臺ちやうだい深ふかく入り給たまふ。後は窃ひそと物音ものおとも、何かなには思案しあんの三つ鐵輪てつりん、縁側えんがはには源藏げんざうが、退屈たいくつ顔がほにきよろくと、欠伸あくびを隠かくす折柄せりがらに、奥より使つかひのお側小姓そばごしやう、恭かしく白臺しらだいに、三つ盃さんを取載とせて、評定ひやうぢやうの間へ差出さしだし、「我君わがみ只今酒宴しゆえんの中、各へ仰出おほさるゝは、武門ぶもんの大將たいしやう、常に忘わすれず樂たのしむべき物は何なるぞ。銘々めいめい此盃このさかづきに書留かきどめて奉たてれ」と、謎なぞをかけたる御上意ごじやういに、皆みなハツと領承りやうじやうし、盃手さかづきて手てに硯箱すじりばこ、筆ふでとり上あぐるもまんがちに、初筆しよふでは將監やうかん慾深よくふかく、金銀きんぎんの

文字書付ける。紙崎主膳が賢人と、書いた心は賢きを、登けて用ふる君子の道、次には和田が國の字を、書きしも常に大將の、下を憐む仁者の道、各臺に直しける。源藏は仲上り、「申し申しどなた様も憚りながら、私も些とばかり思はくがござりますが、幸ひ最前お上から下された此盃に、書いて上げたう存じます」と、ほつかりいへば仁木が引上げ、「ホ、コリヤ出来した、御機嫌に入つた其方、却つて興を催す事、存じ寄りの文字を書き早く上げい、赦す赦す」「ハ、有難し」と源藏は、飛立つ氣色懷の、矢立取出し疾くくと、書認めて盃を、評定の間へ差出せば、左衛門は手に取り上げ、「ム、是は酒といふ文字、武門の大將常に樂しむべき物に、酒といふ字は甚だ不遠慮、御憤りの恐あれば、差控へよ」と止むれば、「ア、イヤ申し申し、憚ながら私が心は左様ではござりませぬ。關八州の公事裁判、御一人の御思慮より、御政道を行ひ給へば、お氣の結ほれば知れた事、御鬱散遊ばすこと、お藥の廻りより、直に驗のある御酒の徳、世の譬にも酒の事を、愁を拂ふ玉筍とやら、兎角に御身健に、御養生は酒の一徳、御無病なを肝心と、酒の文字を差上げます」と、當座の頓智に小姓達、源藏が書いたるも、君の興に差上ぐれば、四つの盃とりぐに、御殿をさして入りにける。後は三人聲潛め、御舍弟のお身の上、納りいかにと評定の、表の方より溜りの侍、罷り出で兩手を支き、「仁

木様へ申上げます、相摸八郡の郡代共、御願ひの筋あつて、直に御對面申したき由、大勢伺候仕る、如何はからひ申さんや」「ナニ此將監に直談せんとや、暫く次に控へさせよ」ハツと答へて取次が、表へ急けば御殿より、御側衆立出でて、「只今のお盃、上覽に入れし所、酒の文字を書いたるは、御身の養生、源藏が發明以ての外御意に入り、向後侍に御取立、縁側の間を勤むべしと、上下大小を下さる」と、臺の物差置けば、三老共に物をも云はず、源藏は悔り顔、「下郎の私勿體ない、御赦されて下さりませ」「イヤ辭するに及ばぬ御上意ぢや、御意ぢや」と小姓達、手々に著せる上下も、どてらの上へしやつきりぐわつたり、恐々紐の緊括り、差しこなしたる業物の、しやんと居直る袴振り、「此通りを言上」と、使は奥へ急ぎ行く。紙崎は目も掛けず、「只今申せ 御舍弟縫殿、御身持放は、傾城が根ざしなれば、此根ざしを打切つて仕舞ふより外はない」「オ、此左衛門も其通り、仁木殿如何致さう」「サレバく、傾城をさつぱりと、打斬つて仕舞ふも近道、此儀は御兩所いか様とも、勝手次第」と意地ある詞、源藏はつつと寄り、「お見出しに預つた私、甲に著て申すではござりませぬが、傾城をお斬りなさるは、大根を切るより易けれど、最前から見受けまするに、あの道芝は持氏卿の御機嫌にも入つてあり、第一は傾城がお手討になるやいな、世上へばつと沙汰廣がり、縫之介様の御放埒が、

我君の不徳と成つて京都へ聞えし時、取返しは成りますまい。此道芝が納め方、私にお任せ」と、いふに將監横手を打ち、驚き入つたる源藏の計らひ、尤至極致した」と、此評定も源藏が、主君へ盡す忠義なり。重ねて奥より御傍衆、「將監様へ御上意あり、只今源藏が評議上聞に達せし所、忠節の趣なれば、我君甚だ御感あつて、只今より苗字を赦し、大杉源藏と名乗り、評定の間を勤め、知行座席も各と同格、則ち衣服長袴、下し置かるゝ者なり」と、高らかに相述べれば、和田紙崎は口を閉ぢ、取持顔の將監も、呆れ入つたる氣色なり。大杉はつと白臺を、押戴けば小姓達、「イザ召されよ」と立ちかゝり、又著せかへる褒れの公服。同じく奥よりお側の使、「左衛門殿御上意あり、紙崎主膳こと、先達て光明寺の普請、只華美を表にして、役目の實儀を失ふ越度、續いて今日傾城を刑罰して、我に恥辱を與へんとしたる短慮の至り、只今より評定の間を下り、縁側を勤めよとの仰なり」と、聞いて胸り紙崎主膳、差俯むいて詞なし。やとありて面を上げ、「委細、畏り奉る、又改めて拙者が願、御取次頼み入る。大杉殿は才智を以て高祿を給はれど、氏系圖正しからず、仁木和田、此の主膳が家柄は、三老の格式にて、奥御殿を相勤める。大杉殿には此評定の間を限り、奥御殿の出仕を御無用になし下されと、我君への御願」と、詞を残し徐々と、縁側の間へ引退り、どつかと坐せば件の使、言上せんと立つて行く。黒付惡

き左衛門も、無念隠して將監と、俱に大杉同座の禮儀、評定の間へ控ゆれば、此方も詞改まり、
 水際立ちし受答へ、取りぐ挨拶ある所へ、當番の侍罷出で、「先刻申し達したる、相摸一
 國の郡代、將監様へ直談の御願、今朝より相待ちをります」「ホ、郡代が願ひ裁判をして取ら
 せん、只今は通すべし」と、將監が計らひに、相摸の郡代打連立ち、庇の間に畏り、郡代
 頭罷出で、「此度光明寺普請成就に付き、我々が領分は仁木殿の御支配故、大磐若經料とし
 て、高割の金子出すべき旨、先達て仰付けらるゝ所、領内へ屹度申付けしが、先年建長寺造營
 の節、經料出金致したれば、此度は御赦免と、領分の百姓ども我々が屋敷へ詰めかけ、歎き
 の願ひ一統す。權を以て押す時は忽ち事亂れ、いかゞ計らひ申さんや。仁木公の御意次第、我
 我も覺悟あり」と、思ひ込んだる願の筋、將監苛つて居丈高、「ヤア虚氣たる郡代共、百姓に
 欺されて、臆病風の腰拔武士、此將監が一旦申出せし事、違變あらば其方共、一々に首を刎ね、
 梟木に暴さん」と、睨み廻して罵れば、郡代共詞なく、事しらせてぞ見えにけり。大杉は立上
 り、郡代に打向ひ、「仁木殿の詞も立ち、其方達が百姓を憐む心も立つやうに、此大杉が差
 圖致さう」「ハ、有難き仕合、雙方治る御仕法は」「ハテ何の別の仔細はない、先づ百姓へ經料
 の金子、赦し遣したがよからう」「ハテ百姓へ赦し遣し、仁木公への申譯は」「ハテそこに

又手段がある、八郡の郡代知行、當年分一つに束ね、我君へ差上げられい」「何、銘々が當年の知行をな」「イヤサ驚くは未熟の至り、百姓を憐む所存ならば、身を捨てゝ武士道の、器量を出すは爰の事、何と得心が參つたか。將監殿の仰も破らず、百姓の心も養ひ、雙方治る武士の器量、天晴々々。身不肖ながら、此の大杉が申し受ける知行を以て、八郡の郡代へ褒美として分ち與へん、安堵召され」と押付けて、人の器量に仕立て上げ、事を治むる大杉が、器量の程ぞ類なし。郡代共平伏し、「ハ、有難き大杉様、御褒美どころではござりませぬ、武士の誠を道引きなされ、八郡の鑑と致さん。ヤ仁木將監様、當年分の郡代知行、經料に差上げます」「ホホ夫では此二木も大慶」「ハ、私共が譽れを取る、師匠は即ち大杉様、暇申して百姓共に悦ばさん」と郡代は、勇み立つてぞ歸りける。又も奥よりお傍の使、評定の間に立出でて、只今の決斷上聞に達し、大杉殿に御上意あり、我祿を捨てゝ國を治むる大慮の程、感ずるに餘りあり。今日より老分の役目として、中央の間へ出勤すべし、則ち烏帽子大紋を、此印に下さるゝ」と、臺の物差出し、「又主膳殿に御上意、其身の不才を顧みず、源藏を奥御殿へ入れまじとの願の條、不届至極の次第なれば、大小を取上げ、門前より追拂へとの仰なり」と、聞いて遺の紙崎も、驚く顔色大杉には、又著せかへる勳の、幅も大紋立烏帽子、中央の間へのツしのし、峯に

朝日の登るが如く、主膳は遙縁側の、麓に曇る村雨と、ふりゆく身こそ是非もなき。大杉は大紋の、袖かき合せ聲涼しく、「ヤア／＼紙崎主膳殿、我匹夫よりかゝる立身、貴殿には君の御勘氣受け、目前天地と別れども、榮え衰ふは世上の常、數ならねども此大杉、御前惡しくは計らふまじ、暫しの艱苦凌れよ」と、いへど主膳は答なく、表の方へと立上る。將監は罵聲、「ヤア／＼原田軍平早く參れ、ソレ紙崎主膳を追拂へ。イザ大杉殿、改めて我君へ御目見」と、左衛門諸共打連れて、前代未聞の出世の袂、翻してぞ入りにける。始終の様子最前より、尾上は一問立出でて、あたり見廻し紙崎が、傍へ立寄り聲を潜め、「様子は残らず承りました、忠臣無二の貴方様、御勘氣の此上は、心元なき御家の有様、行末とても覺束なく、案じ彌増す世の中や」と、末頼みある詞の端、「オ、優しくも申されたり、元町人の其元なれども、今中老とお取立て、其忠臣の魂見込み、頼み置きたき一大事、伯父大膳を初め、方人の仁木將監、花の方御親子を追ひ失はん謀、何卒貴所の忠臣にて、二方の御身の上、偏に頼み存する」と、忠義に凝つたる武士の、低頭平身なしにける。折から出づる奥使、尾上が前に手を支へ、「只今御出でなされませとの、仰せられでござります」「オ、岩藤様よりの使とな。イヤ申し主膳様、最前奥にてお局の懷中より落ちし密書、拾ひ置きしも詮議の手がかり」「成程々々、心善

からぬ大膳岩藤、あの兩人が立振舞、某に成替り、随分心付けられよ」と、云はぬ色なる武士の、別れてこそは立つて行く。奥の方より大杉源藏、道芝を小手縛り、抱への帶を猿轡、引立て出づる足音に、縫之介も走出で、「ヤア新參の大杉源藏、其傾城を何とする」「イヤお騒ぎなさるな、道芝に繩を掛けたは、私ならぬ君の仰せ、細川家のお姫様と御婚禮なさるよならば、此傾城は拙者が計らひ、市中に隠し置き、誰れ憚らぬお妾様、サア御得心か。御承知なくば道芝は、今此座にてたつた一討」「ア、コレく滅相な、夫斬つて堪るものか」「スリヤ御祝言遊ばすか」「サア夫は」「御承知なければ暇乞、サアくく」に口籠り、應とも否とも云はれぬ手詰、道芝は恨めしけに、見上ける目には腹立涙、只伏沈むばかりなり。大杉刀抜き放し、今が最期と振上ける、刀の下に縫之介、「ヤアく待つてく」「待てならば速かに、お受の返答承らん。如何にく」と手詰の折柄、當番の侍あわたどしく、「今日晝の見廻りに、何者とも相知れず、寶藏を切破り、織目の御綸旨失せ候、早速注進仕る」と、息を切つて言上す。ハツと驚く縫之介、「我が預りの御綸旨は、何者が奪取りしぞ。時も時折も折、かゝる悪事も重るものか、こは何とせん口惜しや」と、無念の涙はらくくと、きこつを絞るばかりなり。大杉は聲高く、「ヤア犬淵早參れ、其方は御舍弟を御供申し、君の御前へ來るべし」と、云付け

やれば犬淵は、縫之介を伴うて、奥の間へこそ入りにけり。何思ひけん源藏、道芝が繩解きほどき、縁より下へ突落し、「心あつて赦し遣す、ソレ勝手次第に屋敷を立退け、早疾くく」と詞の下、嬉しさ恐さ一散に、表を指して走り行く。一間を出づる仁木將監、大杉が傍へ寄り、「初より一物ある、御邊と睨んだ眼に違はず、本心聞いて満足致した。然らば事を急になすべし、其手段とて外にもなし、濃茶を君に獻する時、毒藥を入れ人知れず、討取らん我が計略、悦ばれよ大杉」と、速り切つたる詞を打消し、「サレバ其毒藥、籠略の儀は有るまじけれど、互の大望分目の大事、仕損じては事の破れ」と、念を押されて「ナニサく、家に傳へし祕法の毒藥、其疑は無用々々。萬事はナ、斯うく」と耳に口、牒し合せてゐる所へ、早御歸館と呼はる聲、何心なく持氏卿、立出で給へば仁木將監、胸に湛へし惡事の鳩毒、さも忝しく濃茶の手前、謹しんで奉れば、持氏御手に觸れ給ひ、「オ、しをらしや汝が手前」と、既に呑まんとし給ふ折しも、次の間より聲高く、「ヤアく我君、其お茶暫く御控へあれ」と、呼はる聲に仁木は悔り、「コレサく大杉、何故お茶をお留めめさるよ」「サレバサ、あのお茶は毒でござる」「エ、コレ大杉、ソリヤ何を云ひめす、たつた今此將監が、ナ、コレサ差上げた茶、毒があつて堪るものか」「テモ毒に極つてある、但し又毒でなくば、先づ其元毒味なされ」「イヤ其儀は」「ホ、ウ吞まれ

まい／＼、毒の印いで見せん」と、茶碗追取り庭前の、松の繁みに打ちかくれば、數多の小鳥一時に、落ちて果敢なくなりけり。「御覽なされしか持氏卿、此毒藥は南蠻より傳はる祕法、豫て認め置きたる仁木將監、君を弑する謀叛の次第、眞直に白狀」と、きめ付けられて將監が、算用ぐわらりと、「イヤコレ大杉、毒の事は貴殿にも」「オ、一味と見せたは詮議の種の、ふかふかと大事を明す大癡漢、主君の御罰應へたか」と、きめ付けられて將監は、まう是までと打つてかゝる。得たりと源藏突立てば、ソレ遁すなと將監が、下知に群る雜人ばら、右往左往に殖立つれば、立つ足もなくむら／＼と、遁けるをやらじと追つて行く、透を窺ひ曲者が、縫之介と姫君を小脇に搔込み、駈行かんとする後より、慕ひ來りし道芝が、「コレ縫様」と駈寄るを、踏倒し一散に、表をさして駈けて行く。群る中を切抜けて、駈來る奴の雪平、跡に續いて藤内が、大勢引具し追取卷き、「ヤア主なしの紙崎が、二合半の浪人奴、腕を廻せ」と犇めいたり。「オ、好い所へ大淵藤内、叱人なしの氣儘の仕事、イヤ來いやツ」と仁王立、「ヤア緩怠なる毛奴め、物な言はせを打取れ」と、藤内が下知に連れ、打つてかゝる雜兵共。「シヤ小癩な」と抜き翳し、多勢を屈せぬ手練の働き、目覺ましかりける次第なり、一間の内より持氏卿、和田の左衛門御供にて、立出で給ふ折からに、取つて返す大杉源藏、御前に向ひ手を支へ、「本海道は

將監が伏勢あるべし、相摸川より近道を、上屋敷へ御歸館あれ、跡は某計らはん。左衛門殿御供」と、呼はる聲と諸共に、燈し立てたる數の松明、手綱搔繰り召しの駒、和田の左衛門が引添うて、相摸川へと急ぎ行く。折もこそあれ一散に、駈來る畑介が、夫と見るより抜く刀、切込む切先しつかと留め、「ヤア心得ぬ此の振舞、様子語れ」と氣を苛てば、「ヤア成上りの鯨鯨侍、うぬが舌より兄主膳、家は没収君には勘當、汝が首を手土産に、兄への功の時到來、觀念せよ」と又切り込む、飛退つて、「早まるな、僞忽すな。汝が兄主膳殿を追失ひ、まだ其上に持氏公を、毒害なさんとせしは仁木將監なるぞ。謀計顯れ只た今、相摸川へ落行きしぞ、早く追掛け打取つて、兄への功を立てられよ」と、聞くより畑介立上り、「スリヤ兄を失ひ、其上に家國を押領せんと工みしは仁木將監とや。合點ぢや、まつかせ」と畑介は、川原をさして急ぎ行く。降り頻る、夜半の嵐に水音も、物凄まじき相摸川、ハイくくくと先を拂はせ、燈し連れたる松明に、前後を守護し押來るは、足利持氏卿、川端近く著き給へば、跡に引添ふ和田左衛門、御馬前に謹しんで、「水は高く見え候、上の二瀬は水勢薄く、此瀬より御渡し」と、申上ぐれば持氏卿、川原をさして打ち給へば、俄にけし留む駒の足、鎧一當あてさせ給へど、跡へくとたじくく、御落馬危く見えければ、左衛門は駈寄つて、四方をきつと、「アラ不思議や、水火

の中も事ともせざりし御召の名馬、恐るゝ物目にかゝらず、何を指してけし飛ぶやらん。夫馬は乗る人の變を知らず其の妙獸、察する所此邊に、君に敵たふ其の伏勢隠れあるに極つたり。立別れて叢を詮議せよ」と下知する折から、百騎ばかりの隠し勢、関をどつとぞ上げにけり。スハ一大事と左衛門が、眞先に進み出で、「何者なれば路次の狼藉名乗れ」と聲掛ければ、一騎の内に其の有様、大將分と見えたる一人、眞先に大音揚げ、「お大名のお通りと存じたる此我々、命惜しくば大將の、首を渡せ」と言つたり。左衛門は嘲笑ひ、イデ物見せんと太刀抜き翳し、「爰は我等に御任せ、我君には此川を打越し給へ。御跡を取切つて、敵の大勢一人も此川は越させじ」と、群る中へ駈入つて、上段下段虚々實々、入り亂れてぞ戦ひける。君も御馬を早め給へば、お供の同勢えいゝ聲、半渡ると見えけるが、様子見濟し以前の曲者、水底を潜り行き、持氏卿の御馬の足、すばと切たる覺のわざ物、「アレ助け参らせ」と、焦るばかりに眞の闇、そこしら浪と流れゆく、手ん手に松明照し合ひ、川下より御死骸をかき抱き、見奉ればコハいかに、御首は討たれたり。ハツと驚く其所へ、息を切つて駈け来る左衛門、呆れ果てたるばかりなり。思案を極め聲を潜め、「御首討つて立退きしは、一揆の業に相違はなけれど、横死とあればお家の滅亡、只何事も隠密々々。御病氣なりと世に披露し、家中の内より外様へは、

此大變を深く隠し、御跡目相續まで、事穩便に計るべし。ソレ御乗物イザ早う」と、指圖に泣く泣く御死骸、皆々寄つてかき乗すれば、左衛門も跡に立ち、行列とてもそこく、思ひも辿る玉鐙の、館をさして急ぎゆく。此方の岸へ曲者が、ぬつと出でたる其有様、血刀ひつ提け切首を、川へ打込みうそくと、邊見廻しうて、徐々として落ち行く様、不敵なりける三重。

第四

花の名所は、エ、ソレ都に芳野、エストセノセイ、井出の山吹、エ、ソレ杜鵑に花萩よ、エストセノセイ。「何と徳兵衛、花崎の花間屋迄は餘程遠い、休んで一服吞まうかい」「オ、いかにも、そんなら休も」と荷を卸し、堤に腰掛け摺火打、「ナンと眼兵衛殿、今日の花はよかろがや」「オ、サ好い代物ぢや。ア、したが日和が堅いので、花畑の水の世話、年が寄つてはしんどいく」「サア何處も夫で迷惑な」と、煙管を銜へて商話。斯る所へ仁木が家來犬淵藤内、手の者引連れ出で來り、「ヤイ、兩人、足利殿の御舍弟縫之介殿、細川家の御息女操姫、又傾城道芝、若し此道へ來なんだか」と、聞くより眼兵衛耳聳て、「イエ、そんなお方は見えませぬが、其道芝と仰しやりますは、手越の里の傾城でござりまするか」「オ、サいかにもく」「ハテナア。して又其三人は

何でお尋ねなされます「ア、仔細有つて密に尋ねる、身は仁木將監が家來、犬淵藤内といふ者、大杉源藏が家來原田軍平といふ奴、此奴も俱々尋ねる由、先を取られては身が一分が立たぬ。見付け次第早速に注進せば、褒美は望に任せん、必ずぬかるな。家來參れ」と目を配り、別れてこそは立歸る。跡に眼兵衛濟まぬ顔、「ム、そんなら手越へやつた道芝は、欠落をしをつたか」と、いふを徳兵衛が聞咎め、「コレ貴様は其の傾城と近付か」と、問はれてはつと、「イヤ／＼近付でも何でもなければ、今甚う流行る太夫と聞いた故、名は疾うから知つてゐる。ヤ何の役にも立たぬ話して、隙入つては互の損。サアおぢや／＼」と話をば、花で散らして花崎の、問屋をさして急ぎ行く。世渡りも、己が心の儘ならぬ、面も異名も一對の、上見ぬ鷺の善六が、何か工面の巧み面、肩で風切る向ふより、歩み來る原田軍平、邊見廻し、「コリヤ／＼善六、約束の時刻を違へて、よう待たせたな」と、いへば善六、「オ、軍平様、其お叱りは我等が覺悟、俄事が出來ました故に思はぬ隙入り。扱お頼みの一通り、仰聞けられ下されませ」「オ、其丈夫を見込みし上は、話して聞かさん、大膳公よりお頼みの筋といふは、今御病氣と披露してある大殿の持氏殿は、疾うにごねて仕舞つたわやい」「エ、」「病氣分にして置かねば、家督願ひの妨。時に二人の息子達の中、惣領の花若殿は、花の方に出來た子で、正銘正眞の殿のお子ぢ

や。月若殿は雪の方の腹に出生、是が伯父御大膳様と、雪の方と密通なされて、設けられし御子故、惣領子を追退けて、月若殿に此家を遣りたいといふが伯父御の願ひ。實家老の和田左衛門、新參の大杉源藏、此二人がむつかしさに、色々工夫なされるれど、花若殿は御實母の、花の方の御殿にござれば、仕様がぐくの手段にあぐみ、所を我等枕を割り、案じ出した其趣向は、花の方の上屋敷へ、往来しやる其折柄、溢れ者をかたらうて、無二無三に切散らし、花若の母御を仕舞へば、跡は直に搔廻される。供廻りも女ばかり、ひよろく侍五人か十人、お身の手には行きそなもの。斯く大事を語つて聞かす上は、是非仕果せてくれねばならぬ、ナンと智慧ではあるまいか」と、取締なくばつとした、謀とは見えにけり。善六は跡先も、慾の一字にふわと乗り、「お氣遣なされますな、子分子方を此指で、數へて見れば三四十人、命知らずの下駄組あれば、きつと勤めてお目に掛けう」と、承けた此方も滅法彌八、安受合の慾の熊鷹、胸を据ゑて云放せば、「オ、心地よいお身の一言、夫聞いて安堵致いた。委細は追て沙汰に及ばん、夫まではナニ善六」「軍平様、互に祕すべしく」と、邊見廻し善六は、別れてこそは急ぎ行く。後見送つて原田軍平、「ヤア、者共、道芝が行衛尋ね捜さん、イザ来いやッ」と云捨てて、駈行かんとする所へ、思ひがけなき雪平は、走りかゝつて軍平が、首筋掴んで二三間、投

付けられて砂まぶれ、「ヤアうぬは奴の雪平め、又しやくり出て邪魔ひろぐか、ソレ遁すな」と主従が、切つてかゝるを事ともせず、薙立てゝ切り立つる、鋭き切先狼狽眼、「コリヤ叶はぬ」と軍平始め、ばらくゝと遁行くを、「ヤア卑怯者遁さじ」と、追駈けゆく後より、「雪平待て」といふ聲に、はつと悔り振廻り、「ヤアお旦那、紙崎主膳様」「オ、最前より木影にて、様子は残らず見届けた。ホ、でかしたゝ」「ハ様子御存じの上なれば、早お暇」と又駈け出す。「コリヤ待て雪平、そもや駈出して何處へゆく」「道芝を追手の奴原、切散らさん其爲に」「ホ、尤ながら先控へよ。大杉が手を假つても尋ね出し、持氏卿へ道芝を差上げずば御立腹、兎角妨けになるは傾城道芝、不便ながらも手に掛けずばなるまい、ハテどうがな」と主従は、思案取り々なる所へ、「イヤ其お役目は私に、仰付けられ下さりませ」と、木陰を出づる眼兵衛親父、様子ありけに見えにけり。「ヤア終に見なれぬ其方、何を知つて小癪千萬」「ア、イヤ、其様にお叱りなされますな、私は其傾城道芝が親でござります。道芝事は幼い時、奉公に遣しました、今では全盛の大夫になりをつて、勿體ない、若殿が可愛がつて下さりますとの噂、よう聞いてをりまする。今お咄しを聞けば、若殿と娘と縁が深い故、姫君様と御祝言もなされず、又御大將へ差上げいでは、やつぱり縫之介様の御身の難儀。ハテ娘さへ得心して、持氏様

へ参りますれば、何所も彼所もよいぢやござりませぬか。ぢやに依て娘に得心させます程に、此役目を私に、云付けさしやつて下さりませ」と、理非を分けたるさつぱり親仁、思案も深き眼兵衛なり。紙崎主膳打領き、「スリヤ其方は道芝が親ぢやな、ホオ、神妙なる一言、併し女の一途の了簡、いか様に申しても聞入れなき其時は」「ハテそりやモウ是非がござりませぬ、何で助からぬ彼奴が命、人手に掛きよより、私が手に掛けて殺しまする」「ム、緊と其詞に相違はないな」「ハテ親が子を殺しまするに、誰が何と申しませう」「ホ、ウ出来したく、ソレ此の一腰は當座の褒美」「エ、此一腰を」「サ百姓の魂を、武士の性根に入れかへて、緊りとナ、得心さすが國の爲、又娘が爲、合點が往たか」「ハアいかにも、成る成らざるは刀の鯉口、切るか切らぬは生死の境、合點でござります」「其方が宅は」「雪の下」「名は」「眼兵衛と申します」「緊と詞を番うたぞ」と、心残して紙崎は、雪平引連れ立歸る。後打眺め眼兵衛は、暫し思案に暮れけるが、「ア、儘ならぬ浮世の中、切ないは身の難儀、人手に掛けさすまい爲に、俺が殺すと一寸遁れ、併し駈落したといへば、何所をしやうど、餘人の目にかゝらぬ中に、ア、早う逢ひたい」と、案じる親の心が通じ、血筋の縁か道筋を、尋ねくるわの道芝は、殿に放れてうろくくと、走り躰き小石道、ばつたり當るも縁の綱、「オ、是はく、餘り道を急ぎまして思はぬ鹿相、お赦しなさ

れて下さりませ」「エ、滅相な人ではあるわいの。思案して居るどうぶくら、何やら好ささうな
思案も、恠で引込んだ、麁相なわろでは有るわいの。ヤ、娘ぢやないか」「さういはいしやんすは、
オ、父様か」「娘か」はつと刀を後へ廻し、互に驚くばかりなり。「オ、娘、其方に逢ひたうて
逢ひたうてならなんだに、よい所へよう来てくれたなア」「サア私もお前に逢ひたうて、アイヤ、
此中不思議に姉さんにも逢ひました。母様もお健なさうな、マアお前も御無事で嬉しうござん
す。久し振で逢ひましたれど、きつう氣の急く事がある、緩りとお目に掛りませう」と、行くを
引留め、「コリヤくくくく、マ、待ちやくく、其方にはとつくりと、話さねばならぬ大事
のく用がある」「サア私もたとと話したい事があれど、何も叶はぬ大事の用、其内緩りと聞き
ませう」と、行かんとするを又引留め、「サ、マ、待ちやというたらマア待ちやいの。コ
レ、其方が大事の用といふは、若殿を尋ねるのか」「エ、」「ヤコレ隠しやんな、知つてゐるく。
まだ其上に、わりやあの廓を駈落したであらうがな」「ム、合點の行かぬ、成程私は駈落しまし
たが、様子を知つての其譯を、サ話して聞かして下さんせ」と、いふ顔眺め涙ぐみ、「何でい
ねばならぬ事、がマア是は斯うして置いて、其方には此親が、改めて無心がある、聞いてたも
か」「ム、久し振で逢うた父様、無心とは何でござんすえ」「オ、外の事でもない、其無心といふ

は、縫之介様の事を思ひ切つて、持氏様の御殿へ、お側に上つて貰ひたい」「エ、變つた事をいはしやんす、何でも是には」「オ、様子があゝ、イヤモウ様子が無うてなろかいやい。コレ若殿縫之介様は、そちと深う云交してござる故、姫君と御祝言なく、夫故細川家へ申譯立たず。二つには持氏様、お心を懸けなされたとある、差上げねば是も亦、縫之介様の御身の難儀、其方が心を取直し、若殿様を思ひ切つて、持氏様のお心に随へば、われが身の爲、おれも出世、殿様も又御祝言なさるれば、お家も治まる何所もよい。サ爰の道理を聞分けて、得心してくれコリヤ娘、モこんな無理な事を頼む親、さぞ酷い親と思はうが、何ぞ譯がなうては頼まぬ。第一はわれが身の爲、何卒聞入れて下され」と、頼む涙聞く涙、俱に涙の淵ならん。「思ひ掛ないお頼、定めて是には様子がござんせうが、父様、是ばかりは堪忍して下さんせ。殿様の事思ひ切り、姫君との御祝言を、どうマア夫が見てゐられう。外の事なら何でも聞かう、此事ばかりは赦して」と、口説き歎けば、「エ、聞譯のない、わりや親への孝行忘れたな、行かねば其方が爲にもならぬ。コリヤ泣かずとも得心してくれ、コリヤ泣くなく。サ、娘、賢い者ぢや、サ聞分けてくれ。コリヤ、手を合して親が拜む、コリヤ拜むく」「エ、是いな、勿體ないく、段々の入譯を、聞入れぬ憎い奴と思うてぢや有らうけれども、外の男を持つ事の、ならぬとい

ふ其譯は、何を隠さう殿様の、お種を宿してをります」と、聞いて恠り、「ヤア、そんなわ
りや懐胎してゐるか」「アイ、しかも左孕」「アノ男の子か、ハア」はつとばかりにどうと伏
し、暫し詞もなかりける。道芝は面映く、勤に誠はない物と、いへども深い互の縁、若殿様に
思はれて、幾夜さ交す睦言の、其きぬぐも重りて、可愛さ積るお情の、やゝを設けた二人が
仲、父様申し、へエ、餘まりつれない胴慾な、私が心も思ひやり、堪へて下んせ父様」と、い
ふも涙の淵瀬川、戀の筈堰留めて、啣ち歎くぞ道理なる。親は胸までせぐり來る、涙吞込み
呑みこんで、「コリヤ娘、オ、夫なら我がのが道理ぢやくく」尤ぢや。ハテモウ其身に成つ
たら何とせう、様子を聞けば聞く程不便、是非がないと諦めて、可愛けれども切らねば」「エ
エ」「ア、いや、サイノ、縁を切らねばならぬ所ぢやけれども、モウ切らぬがよからうといふ
ことぢや」「ム、そんならアノ聞届けて下さんしたか、エ、忝なうござんす」と、知らず悦ぶ
子の心、親は不便と血の涙、「左右いふ中モウ日暮、今夜はこつちに泊つて、久し振ぢや、婆や
姉に逢つたがよい」「アイく、そりや猶嬉しうござんする、そんならさうして下さんせ」と、い
そいそ悦ぶ道芝が、先へ進むは無常の風、早誘ひ來る暮六ツの「ハアモウ鐘が鳴る、幸ひ人の
通りもない、向ふの土橋で一思ひ」「エ、父様、何いはしやんすぞいナア」「アイヤ、あの向ふの

土橋はの、人の渡る度毎、危いといふこと」「エ何の危いことがある、私が先へ渡るわいな」「ヤ何ぢや、先へ渡る、オ、さうぢや、どうで渡らにやならぬ其身、とつくりと覺悟して、お念佛申して渡つたがよい」「オ、仰山な、橋一つ渡る事を、何の苦にする事がある、サアござんせ」と先に立ち、知らぬが佛眼兵衛が、心は鬼の目に涙、堤傳ひの野邊送り、消ゆる間近き道芝が、憂身の果こそ三重。

第五

秋の山、紅葉の床に男鹿の寝たるしをらしや、經緯に露霜おりし、錦は山の紅葉ばの、渡らば錦なか絶えん、憂き世渡りの數々に、憂きを積りし雪の下、薬屋の軒の侘住居、娘お來が賃仕事、ぶんぶ綿繰くるくと、絲より細き瘦世帶、持に暇なかりけり。折から鄰の女房が、佐兵衛を連れて内に入り、「オ、コリヤお來様、いかう精を出さんすの」「オ、お市様ようお出、何程あたふた精出して、高が細い此仕業、モ埒の明く物ぢやござんせん」「オ、そりや道理、シタがそんな細い仕事せうよりも、此中お前の言はんした、其相談が調うて、今其お人を連立て、來は來たがお來様、内方の首尾合は」「アイ、好いともく、何から何までお市様の、モい

かいお世話でござんした」と、愛想笑顔に見とるゝ佐兵衛、「イヤコレ隣のおかみ様、お前の言はんした代物は彼子かえ」「アイ彼子でござんす」「シタリ見事、そして金の望はえ」「夫はお前の目一杯に」「ム、イヤモ百兩が物はきつと有るて、百兩で手を打とかい」「アイ、そんならさうして進せて下さんせ。成程々々、此方にも氣に入つた代物、今半金渡しましよ、跡金の五拾兩は、親父の戻られ次第、證文に印形さしやれば其時に渡します。おれが行て来る所が有れば、支度して待つていやんせ、つい戻ります」と詞數、言はぬは粹の商賣がら、好い代物と心には、獨笑して出でて行く。「お來様、マアく相談が濟んで目出度ござんす。様子うすく聞いた所が、お前も今は新婦にならんしたさうなが、不躰ながら、今分のお前の身で、大まいの金の入用とは」「アイ、成程ソリヤ合點行かんすまい、其譯と言ふは外でもない、母様のぶら病、物喰はんすと間もなう吐す、膈とやらほん胃とやら、むつかしい病ぢやけな。百日の内直らねば、死なしやんす病ぢやと、聞く悲しさは身も世もあられず、方々の醫者衆に見て貰ふ度毎に、療治とてもないではないが、逆も貧しい身の上では、所詮養生も届くまい。此病には人參を、飽く程入れて吞ませねば、内が衰へて有るによつて療治が届かぬ。時節ぢやと諦めよと、聞いて悔しい今の貧苦、大まいの金才覺する、當も手當もないしよの詰り、

二人の親達には祕し隠しに、此頃中お前を頼み、此身を賣つて其金で、母様の人參代、思ふ程療治して、夫で行かねば念も残らぬ。金の入る様子、必ず沙汰して下さんな」と、親を思ひの孝行に、お市も聞いて貰泣、「孝行なお前の眞實、恵みがなうて何とせう。お來様、後に後に」と門の口、泣く目を拂うて出でて行く。お來は跡に獨言、「ア世の中は様々ぢやな、夫源藏殿は出世の望で家出さしやんしたが、何所に如何して居さんすやら、よもや出世をさしやんしたら、厭別といふではなし、便のない事も有るまい。わしや置去りにあうても、更々恨みる心はない。神佛へ向うても、母様の御病氣、二つには源藏殿の出世をば、祈らぬ神も佛もない。若し世に出でなば元の夫婦と、書殘さんしたを樂しみに、月日を數へ待つわいな。ア悪い事が重なれば、又此様に重なるものか、人の身の上と水の流程定まらぬ物はない。アと思ひ廻せば廻す程、兄弟ながら憂身の上、妹は手越の里に勤の身、此姉も同じ川竹、前生よりの約束と、思へば因果な身の上」と、又も涙にくれるたる。斯る折柄表の方、大小立派の侍一人、内の様子を窺ひく、小陰にこそは忍びるる。漸顔を上げ、「ア、愚癡な事思ひ出してつい泣いた、我身の事に身を賣る者さへ有るに、況して親の爲ちやもの、泣くまい。浮き沈みは七度と、いふを此身の樂み」と、心も髪も取上ぐる、勝手へ萎れ入る跡へ、忍ぶ破垣紙崎主膳、續いて

奥へ忍び足、ひそくとして隠れ入る。斯くとはしらがの母親は、一間を出でて、「コレハく、お來も仕事は仕舞さうな、わしも今日は又鹽梅がいかう悪い。ア、此親父殿は何してぞ、いづよりも遅い戻り、道で持病が發りはせぬか、ア、氣遣な」と老の身の、案じに胸も休まらず。そよと吹く風いと猶、身にしみ渡る妄執の、非業の刃に道芝が、消えし魂魄我ながら、形を假りのしよんほりと、「母様はそこにかへ」と、言ふに悔り、「ヤア其方は娘、思ひがけない何時の間におぢやつた」と、言ふも不思議の立姿、「母様御久しうござんす、様子有つてせつない苦しい憂きめに逢うて、心がかりな事有る故、裏からそつと只一人、父様はお留主かへ」「オオ親仁殿は今朝商物持つて往て、未だ戻らしやれぬ故案じて居る」「ム、夫は幸、お前に密に咄したい事が有る、奥へ來て下さんせ」「ム、久しう逢はぬ此母に、咄したい事が有る、そして夜中に只一人、竊に咄したいと有るは氣にかよる、マア奥へ」「アイ、マアお前から行かしやんせ」「そんなら娘、サアおぢや」と、何のけんによもなんど口、打連れてこそ入りにけり。色香漏れくる破障子、移す鏡の柳腰、見かはすばかり髪形、木綿似合はぬ女房盛り、「ハア短夜のモウ初夜前、今宵四つが内の名残、終に仕なれぬ曲輪の勤、八文字とやら如何するぞ。エ、こんな事なら妹に、習うて置いたらよかつたに、ア、どうやう小褌をかう取つて、エ、口惜し

い」とはらく、涙、雨夜の月と疑がはる。折から表に大淵藤内、うろく、眼に戸口を覗き、「家
 来共アレ見たか、アノ女めは慥に尋ぬる傾城め、さうぢやく」と込入る主従、母はかけ出で
 立塞がり、「ア、コレ、聊爾せまい、こりや何事」「イヤとほけまい、手越の里の傾城道芝、足
 利の館へ男に化けて入込みし科、首討てとの御説意」「エ、イ、アイヤ、そんな傾城が此方
 へ来た覚えはない」「ヤア狸婆め、隠しても隠されぬ道芝が親里、此内へ戻つてゐる事、見届
 けて此詮議」と、聞くより母ははつとばかり、塞がる胸に思案を極め、「ハテ此上は是非に及
 ばぬ、逆も遁れぬ娘道芝、如何にも御渡し申さうが、暇乞する間」「ヤアなまぬるい、叶はぬ
 願、猶豫せば儕共繩打たうか、何とく」とひしめく所へ、「申上けます、只今僕の雪平め、
 向ふの辻で見付けし故、引ツつかまへうと存じたれど、旦那を差置き慮外と存じ、御注進申
 上げます」と、聞いて恠り、「ナニ雪平めがそこらにゐるか、エ、邪魔なやつ。引縛るは易けれ
 ども、今合うては勝手が悪い。コリヤ婆、首は後程受取りにくる。家来共、道をかへてかう
 参れ」と、ひるまぬ顔は長田の裏道、家来もしどろに立歸る。母は吐息をつくりと、お來は
 何氣も「ナウ母様、そんなら妹は戻つてゐるかえ、何所に居やるえ。そしてマア、ひよんな事
 受け合つて、此納りはどう付く事、私や氣遣なく」と、案じも眞身の姉妹思ひ、思ひ續けて

母親は、詞なく顔を上け、「其方にはまだ逢はさぬが、最前道芝が戻つて身の上咄し、戀故に科人に成つた譯、いふに違はず追手の侍、手詰に成つた詮の詰りは、お來、其方に頼みが有る、親子の中でも是ばかりは、餘りく云ひかねた。逆様な事なれど、妹道芝が身代に立つて死んでたも」「エ、イ」「オ、胸りは尤ぢやく、世の世界に、是ほど無體な無心はなけれど、胤腹一つの姉妹、可愛さに何のかかりが有るぞいの。分けて妹が殺されぬ譯は、足利殿の弟御、縫之介様に思はれ、我々ふぜい、娘が身は輕けれど、重い胤をやどしてゐる、其子が大切さ、今の追人が見違へた程、似たが因果の此身代、若殿の代に立つと思つて、母に命をたもやいの」と、思ひがけない頼みには、思案とかうも涙ぐむ、難儀は二つ身は一つ、心一つに分けかねて、「成程尤な様子聞いた上、さらく未練ぢやないけれども、氣の毒な事は、私もこちらに様子が有つて、少し命が入ります。知つての通り義理ある夫、別れた時から身に持つた、胤は私も同じ事、尤お歴々と浪人と、位は違つて有るけれど、夫に預かつた大切さに違ひはない。命一つは惜しまねど、貧しい夫を持つた故、お中の子までは程に、位が違ふかと思へば、口惜しうござんす。とはいへ妹の命も大事、何卒仕様はない事か」と、身賣の譯も今更に、言はぬがましの投島田、身を投伏して泣居しが、「ア、さうぢや、幼いから

病者びやうじやな私わし、妹のお宮いもぎが傾城けいせいになりやつたも、其扱そのあつかひに入いつた金かね、私わしが夫をつとは浪人らうじんの不自由ふじいうさ、何なにかに付つけてお前方まへがたに、御苦勞ごくらうかけるも皆私故みなわしゆゑ、恩おんの有ある妹いもぎの代かりに成なる事ことぢやもの、成程なるほど潔いさぎよう死しにませう。道芝みちしばは何所どこにぞ、逢あうて一言ひとことひたい事が「オ、そんなら死しんでたもるか」「アイ」「エ、忝かたじけない出でかしゃつた、よう得心せきしんしてたもつたなう」と、死ぬる我子わがこに手てを合せ、「悦よろこぶ親おやは我われながら、さぞ氣遣きづかひとも人目ひとめには、かゝる例たとひは何なんの罪つみ、何なんの因果いんぐわ」と隠泣かくしなき、姊あねも後うしろへ残のこる目に、涙なみだ包つつんで奥おくへゆく。同じ迷まよひの親心おやこころ、眼兵衛がんべゑはとほくと、花はなの盛さかり切捨きりすつる、子こは三界がいの首枷くびかせと、肩かたに思おもひの枯柴かれしばを、荷になうて歸かへる門かきの口くち、「可愛かはいや婆はくが朝あさ夕ゆふに、影膳かげぜんするゑ待まつ娘むすめ、靈供りやうぐとかはる世よの有様ありさま、思おもへば我家わがやも這入はいりかね、竹たけむ中なかつにも女によう房ばうが泣聲なきこゑ、「浮世うきよの義理ぎりとは云いひながら、思おもへば酷じつこい親おやの身みで、現在げんざい我子わがこを殺ころすか」と、くどくを門かきに聞きき恠びつく、もしも様やう子を聞きいたかと、危あやみながら上あがり口ぐち、「コレ婆はく、今云いまやつたは何なんの事ことぢや、誰たが事ことぢや」と尋ねられ、ハツとしながら當座たうざの間に合あひ、「イヤナウ、此方こなたの戻もどりの遅おそさに、思おもはずとろく轉寢うたいねに、我子わがこを殺ころした夢ゆめを見て、ひよつとアレが本ほんの事ことなら、悲かなしからうと思おもうて涙なみだが」「何なんぢや夢ゆめに見みた、ホイ親子おやこの血筋夢ちすぢゆめに知しらせが有あるも道理だうり」「コレ親仁殿おやぢの、夢ゆめに知しらせとは何知なんじらせ」「イヤ夫それは、アノ妹道芝いもぢみちしば、廓くわくへ往いつてから便たよりもせず、生いき

たとも死んだとも、夢になりとも知らせさうな物ぢやといふ事」「オ、本に親仁殿、最前から妹が来て、イヤモウ氣遣さしやんすな、夫はく達者で、今奥で姉と咄してゐるわいな」ヤアと恠り、「ドレくく何所に」と、覗けば姉と差向ひ、「ソレ好い女房に成つたで有らうかの」「ホンニさうぢや、やつぱりさうぢや、ア、南無阿彌陀く」「エ、忌ましくしい、達者で戻つたに念佛は何ぞいの」「サイノ、めんよう年寄といふ者は、念佛が口癖に成つて、嬉しい事にもつい南無阿彌陀、餘り妹が大きう成つたで、嬉しい過ぎて涙がこぼれる」「オ、ソリヤ道理いの、嬉しい事さへ夫ぢやもの、嘸ぞ此方の事を聞かしやんしたら、ホ、ホ、オ、私とした事が、ひもじからうに焚付けて、茶漬進じよ」と勝手口、泣きに立つこそ哀なる。「イヤひもじい所か、おりや胸が一杯に成つて有るわいの」と、いふ間なくく女房が、附木燈して佛壇に、上ぐる御明いはねども、心合ひたる女房中、花は手生と眼兵衛が、立つる具足の鶴龜も、短い壽命と觀念し、妻が撞木を取上ぐれば、「エ、是婆、今夜は佛の日でもなし、其方が看經する事は無い、念佛はおれが申すわいの」「イヤ此方の看經はいつでも成る、今夜は私がお念佛の入る事が有るわいの」「イヤサ、おれも念佛申さにやならぬ事が有る」「オ、そんなら共に」と同音に、鉦打鳴し南無阿彌陀、くくくく、唱ふる念佛は變らねど、言はず語らず二親の、涙く

ろめん方もなき。一間の内も姉妹が、明けぬ心の闇深く、「ナウ妹、久しぶりで顔を見て、嬉し
しいも暫しの中、いふに云はれぬ譯有つて、此來は今宵から、遠い所へ行かねばならぬ。何時
又逢ふやら逢はれまいやら、お年寄の二親に、たつた一人の妹、随分達者で居てたもや。夫
に付けても頼みたいは、親の爲に大磯へ身を賣りたれど、夫も行かれぬ譯に成り、行かねば母
様の用にも立たず、言かねた無心なれど、私が代に大磯へ、ちとの間往て下さると、其金で母
様の、アノ病が直りさへすりや、私や死んでも心は残らぬ。只さへ其方は私故に、一度ならず
二度の勤、頼むも此方に何やかや、様子は跡で知れる事、一生の無心を又頼みます妹」と、今
はなき身の道芝とも、知らぬ心根猶悲しく、「姉様の爲なれば、火に入り水にも入るけれど、肝
心の此體が、今日有つて、明日は果敢ない世のならひ、其上にお前まで、そんな便ない事い
しやんす。今から父様や母様は、誰を便りに、さぞ歎の上のお歎と、一倍弱らしやんせうと夫
が悲しい。お前ばかりは何方へも行かずと、何卒二親の御介抱申してたべ。何いふ事も此世で
は、皆徒事と成り果てる、跡の悔みの悲しさ」と、親子一世の隔の障子、別れを急ぐ四つの鐘、
南無三寶時移ると、母は一腰さし心得、「サア今切るぞ」と覺悟のお來、「ナウ姉様殺させぬ」
と、覆ひに成れば亡き人とも、知らぬ母親、「コレく大事の妹、怪我しやんな」と振上ぐる、

「ヤレ待て女房」と眼兵衛が、姉が手を取り引退くる。「イヤ／＼切らねばならぬ譯」「切らしはせじ」と姉思ふ、冥途の魂魄眼兵衛が、「今は是まで南無阿彌陀」と、女房が刀引つたくり、すつぱと切つたる刃の下、形は消えて佛壇の、前に残るは首ばかり。「ヤア／＼／＼親仁殿、何で妹を切つたのぢや」「父様是は」と泣くお來、呆れ涙の折柄に、肝煎が高呼り、「サア／＼姉様、跡金持つて迎ひに來た。泣いて居てはいつまでも果てぬ、是から勤の大事の骸、サア／＼爰から直に乗つてござれ」と、泣入るお來が手を取つて、無理に連出し手を叩けば、聲諸共におろせ駕、門口に昇据ゑれば、「コレ／＼娘を何方へ連れて行く、様子を聞かう」と取付く眼兵衛、お來は涙の聲を上げ、「コレ／＼父様、久しう母様の御病氣、其上ふがひない夫を持つた故、お年寄られて色々の御艱難、此身を賣つてせめてもの御恩報じ、此事を夫へも、くれ／＼傳へて下さんせ」と、いふ聲共に伏沈み、泣くを泣かせず、「イヤサ様子は跡の事、先づ娘子の身の代」と、投出したる五拾兩、「サア乗らんせ」と無理遣りに、駕におし入押込んで、道を早めて急ぎ行く。眼兵衛は金取上げ、「コレ／＼婆、おりや一つも合點が行かぬ、主有る姉が勤奉公、定めて是には様子が有る。サ、サ、きり／＼譯を聞かしてくれ」と、せきにせき立つ此方もうろ／＼、「サ、私も姉が勤奉公に行く事は夢にも知りませぬ」「何ぢや知らぬ」「オイ

ノ、此方の留守に足利家の追手が来て、妹を渡せとのつ引ならぬ手詰の難儀、一寸遁れに受合ひしが、縫之介殿の種をやどせし其様子、私とても其昔は、足利家の恩有る者、似たを幸ひ、アノ姉を身代に頼みしに、何で又此方は妹を切つたのぢや。活かして戻しや、活して返しや」と、あやもなみだに伏沈む。眼兵衛も咽び入り、「尤ぢや、が妹を切つたは様子有つての事、主有る姉に身を賣らせて、聲へ何と云譯せうぞ。身の代の此金戻し、姉のお來を取返す」と、駈出すを「ヤア、眼兵衛、申聞かす子細有り、暫く待て」と一間より、立出づる紙崎主膳、是はとばかり眼兵衛夫婦、更に不審は晴れやらす。紙崎は二人に向ひ、「ナニ眼兵衛、姉のお來が身を賣りしは、大磯ではないわいやい」「ムウ、シテ又姉が身を賣りし、其先は何處何方」「オ、妹道芝を其方に討たせたは殿の爲、我家來を曲輪の者に仕立て身の代を與へ、買取りし姉のお來は、此主膳が詮議有つて、我方へ召捕りしは子細有り。姉が夫の名苗字を聞くに、我推量少しも違はず、詮議の種の姉が身の上、様子は追つて申し聞かさん。先づ何を差置きて不思議なるは此刀、眼兵衛、コリヤ以前より其方の所持なるか」「ハイ、其昔手一合取りました故、今に放さぬ鯉搔き」「イヤ、尋常ならぬ名作の證據、此刀を振上ぐれば、最前死靈が消えしは、正しく武將の家の重寶、午王丸の名劔、先年赤松滿祐此の太刀を奪ひ取り、謀反成ら

ずして亡び失せ、其後行方知れざる名劔、是を所持する其方は、滿祐が餘類と見た目は違はじ。
名劔只今手に入ると云ひ、謀反人赤松滿祐が悴、赤松三郎といふ者、大將軍に仇をはさむよ
し、何國に在るとも行方知れず、此行衛を知つたる者は、其方ならで外になし。サア眞直に白
状態よ、陳ぜざるに於ては、骨をひしいで白狀さす、サア／＼何と／＼と詰寄せられて眼兵衛が、
刀引抜き我腹にぐつと突立つる。コレハと取付く女房を取つて突退け、「女房泣くな、其方や
何にも様子は知るまい。反謀人赤松滿祐の足輕、嘉嶋權平といふ者、物數ならぬ者なれども、
魂は誰に負くべきや。足利家に仇せんと、心を盡す此年月、我娘道芝が懐胎なせしは足利の
種、一刀に差殺し、主人へ立つる寸志の忠義、今主膳殿に見顯はされしは運の盡、さりながら
侍の數に入り、切腹するは我が本望、モウ何にも物申さぬ」と、きり／＼と引廻す。「ヤレ
待て嘉嶋、小身には似合はずハレうい者、娘道芝を殺したも、うはべは縫之介殿へ忠義と見せ
て、下心は足利家の胤を懐胎したる故、水子も敵の片割と、娘と共に指殺す、夫程の根強い性
根、如何程に拷問するとも三郎が行衛は言ふまじ。最早尋ねぬ、安堵して勝手に死ね。コリヤ
其方に遣した其刀は、我親紙崎兵庫、赤松滿祐を討取りし時、無念こつて刀に喰付きたる、赤
松が最期の齒形、其刀で切腹すれば、主従一所に討死も同然ぞ」と、聞くに彌増す残念さ、「主

人の最後の此刀で、娘を殺し我も死す、因果の業は今果す、婆去つた、縁切つたれば赤の他人、如何に忠義なればとて、我子を殺し、また顔も見ぬ初孫を刺殺す、婆勘忍してくく。科人のおれが爲に、必ず菩提やなど弔やんな、娘が爲に尼に成りと、心任せ」と一言は、今はの情も情ない、娘は殺し夫に別れ、死際になり退去りとは、何面目もないじやくり、心を察して紙崎主膳、「假にも殿の暫くも、御寵愛有りし道芝が、母には詮議のお構ひなし。姉が身の代百兩の、かねては妹が追善供養、跡弔ふが肝要なり、イザ歸らん」とゆふ闇に、出づるを遣らじと、犬淵藤内、心得主膳が小柄の手裏剣、丁ど來かゝる雪平が、一人も残らず鑿し、切つて捨てたる老の髪、未來を契る友白髪、先立つ無情の鐘の聲、風にちりく散る花の、盛は雪と消え果てよ、月の出汐に立出づる、忍び編笠夜半ながら、不覺の歎戀ゆゑの、その亂れ髪俤に、涙の露を賤が家に、置き別れてぞ三重出でて行く。

第六

かけまくも、太敷き立てし宮柱、和光の塵も影清き、ときはかきはの神樂唄、千代を壽く鶴が岡、弓矢取る身の守とて、群集は押しも分けられず、一際目立つ餌乗物、足利家の奥女中、花

の方の御代參、咲揃うたる花盡し、外珍しき女郎花、さはらば落ちん玉あられ、ふるや鈴の音
大麻の、引く手に神も靡くらん。當社の一禰宜榊兵部、夫と見るより出迎へば、乗物明けて
局岩藤、跡に續いて中老尾上、行儀も遺しとやかに、會釋こほして立出づれば、神主兵部も共
に式臺、「先以て今日の御代參、御苦勞至極」と挨拶の、詞に付いて局岩藤、「オ、其後はお久
しや、兵部殿、相替らず今日の代參、足利家の武運長久、御祈念頼入りまする。其次手には此
局が、諸願満足を精出して、御祈りなされ下されよ」と、苦み走りし空笑顔、仕濟し顔に相述
ぶれば、尾上は夫とさし心得、一封の願書取出し、花の方取分心を籠めし此願書、御奉納下さ
れよ」と、差出せば取納め、「イヤ御神拜遊ばせ」と、詞の内に局岩藤、「イヤナウ尾上殿、ち
と私用ながら、待合すが有る程に、先へ往て下され」「左様ならばお跡から。兵部殿御案内
頼みます」「然らばお出」と榊兵部、先に立つて鳥居前、宮居をさして引連れ行く。折もこそ有
れ向ふより、身中が欲の擲面、驚と名うての善六が、きよろ／＼眼うそ／＼、見ゆる此方
に岩藤が、「ヤレ待兼ねました、委細は昨日の文の通り、日外も大膳殿よりの密書を、問注所
で取落し、様々と探して見たれど、かいくれに見えなんだが、十が十尾上めが拾ひをつたには
違ひない。スリヤどうも其分に置かれぬ尾上め、夫故に今日の趣向、まだ其外に何や彼や、咄す

事がたとと有る、委細の譯は神主の所で」「吞込みましたサアお出」と、人喰馬にも合口と、打連れてこそ行く跡へ、桃井求馬時房が、何の願の神詣、鳥居間近く歩み來る。引返して善六が、邊きよろしくねめ廻し、求馬が傍へ立寄つて、「イヤ申しお侍様、終にお目にはかかりませぬが、此驚の善六といふ男が願ひ、初對面の天窓から、氣に入らうが入るまいが、是でも非でもお侍様、聞いてもらはにや男が立たぬ」と、何か根ざしの云廻し、求馬もむつと若氣のはやり氣、思ひ直して和らを入れ、「成程今御自分の申さるゝ通り、終に見もせぬ某へ、是非にと有る其頼み、一通り承らん」と詞の下、懷より文取出し、笑顔もちく、「申し、今の様に云うた時は、小むづかしき事云ひかけて、喧嘩でもしかける様に、お腹も立たうし、御合點も參りますまいが、高が斯ういふ筋でござります。エ、アノお前に、モウくく死ぬる程惚れてゐる、其女中が命にかけて私への頼み、私も又あた臭い事いうた事はない故、持前の喧嘩仕立て、お前を口説く文使の私、一ツ屋敷の傍輩同志で色事は法度ぢやけなが、命づくの戀の取持、お前ぢやとてまんざらに、餘り腹も立ちでもない事、其文納めて下さんせ」と、かさ押しにやる文使、荒木を切つて取持口、求馬は何の心もなく、文取上げて見るより恠り、投返さんとしたりが、役柄と云ひ日頃の氣質、後日の當りも如何ぞと、一寸廻れと、「コレハ

コレハ善六殿、存じ寄らざるお取持、何が差置き、我等とても岩木にあらねば、お志何程か祝著、此文忝う受納めます。返り事は此方よりと、よしなに返事頼み入る」と、懷へ入るよを見て、俄に作るあいそぶり、「扱もくお前様は、數ならぬ此私が一言を、お立てなされて下されます只今の御返事、有難いく。主も嘸此返事待ちに待つてでござりませう。ヤ何お侍様、必ず御返事待ちます」と、儕一人がでかし顔、肩怒らして懷手、宮居をさして入りにけり。跡に求馬は只一人、文の返事を兎や角と、思案に小首傾けて、暫し小陰に佇めり。斯くとはいざやしらにぎて、縁の糸いふ結合す、人目をそつと蟻早枝、としやおそしと走寄り、物をもいはず求馬が顔、うらめしさうに打眺め、「エ、聞えませぬ求馬様、アノ意地わるの岩藤が、目顔を忍び轉寢の、其睦言の度々に、其方を退けてそもやそも、外に枕はかはさぬと、云はしやんした其時の、其一言を樂しみに、思うてゐるに胴慾な、つれないわいな」とばかりにて、かこつも戀のならひかや。求馬はほど持てあまし、「コレハく又其方もマア嗜みやいなう」「イエイエく、よもやとは思へども、油斷のならぬは男心、私や夜の目も合はぬわいな」「ハテ疑ひ深い」と手を取れば、「ア、嬉しや」と寄りそうて、わりなき仲ぞ睦じき。「不義者見付けた動くな」と、聞くより二人ははつとばかり、「オ、お局様何の間に」「イヤ今日は私も御

代參に來ました、ヤコレ味やらしやるなう。大切な御使に、道草の癡話遊びか、オ、好い行儀ぢやの、イヤ結構な御身持ちやわいの。不義はお家の堅い御法度、ふたり共に覺悟しや」と、俄に詞あらくしく、穗に顯れしは戀の意地、終に咲く花ならで、二人は雪と消えたき思ひ、「イヤ申しお局様、必 亀相おつしやりますな。私が身に取りまして、更々不義の覺えはござりませぬぞ」「イヤおしやんすなく、たつた今求馬殿と、吸付いたり引付いたり、抱付いたり取付いたり、イヤモしたよりい事の有る條を、コレ此黒い目で見て置いた。何と夫でもあらがふか」と、齒に衣きせず云ひまくれば、求馬こらへず、「これ岩藤様、人の不義を改める此方こそ不義の詮議」「ヤア何ぢや、此岩藤を不義者とは、コノぬつぺりとした顔わいの」「イヤコレ岩藤様、其いやらしい目付で付けつ廻しつ、今も今とてコレ此文」と、出して見すればはつとばかり、赤面すれば早枝引取り、「こりや潔白なお局様ぢやわいな。不義はお家のきつい御法度、サア此方より申し上げうかえ」「サア夫は」「但し拙者が言上致さうか」「サア夫は」「サア」「サア」「そんなら、モようござるわいなう、不義の詮議は互に是限、イヤ何求馬殿」「お局様、スリヤ申し分はござりませぬか」と、早枝と目と目見合せて、別れてこそは立歸る。折柄告ぐる供廻り、「イヤ御立」とゆふばえの、中老尾上先に立ち、多くの女中取圍み、對の帽子も一

様に、群居る鷺の如くにて、賽しの鳥居の前、「イヤお局様、御一所に」と、云ふに岩藤不承承、立上らんとする所へ、來かゝる鷺の善六が、兩手を土に、「イヤお局様、最前申上けんと存じましたれど、かの事に取れまぎれまして、ナ申し、ばつたりと失念を仕りましてござります。外の儀でもござりませぬが、此間仰付けられました金子の儀、へ、御受取り下さりませ」と、半分云はせず「コレ善六、何時もながら心遣は過分々々。しかし流石は町人の其方、奥向の事知らぬ筈は尤、コレ此岩藤は局役ぢやぞえ、むさくろしい物を取扱ふ役ぢやない。其金は針妙の澤に渡しや、宜きに」とばかり詞數、云はぬ色なる山吹の、包取出し善六が、「ア、町人と申す者は、賤しい者でござります。神佛より尊く思ふ此金を、むさくろしい物なと、お手に触れぬといふは、ア、又格別なお歴々様。うなる程金持つても、町人といふものは、ア賤しい物でござります」と、云ひつゝ金を懷へ、お屋敷さして急ぎ行く。跡打見やり局岩藤、「アノ善六とした事が、私がいふ事氣にもさへず、正直な生れ付、何と思はしやる尾上殿、町人には珍らしい氣恥しいアノ善六、町人は賤しい物と、感心した今の様子、ヤ、こりや本に、ちつと此方には差合で有つた物。ホ、ホ、オ、私とした事が、づかくと氣の毒な、イヤ本に尾上殿、アノこな様の宿といふは、金持なれど町人、假親しての御奉公、スリヤ今私が言うた事、氣に

障やしませぬか」と、味な所からしかける喧嘩、扱はいつぞや問注所にて、密書を拾置き事、氣どつて今日の此時宜と、思へば猶もそらさぬ顔、「コレハ又岩藤様の痛入ります御挨拶、何のまあ私が氣にさへまするの何の彼のと、申す様な事がござりませうぞ。おつしやる通り町人の娘、親共がお出入の御縁を持ちまして、御奉公に上りまし、だんくとお取立、かやうな重い御奉公も、有難い此身の仕合せ、根が町人の私が事、嘸や不束な事ばかりでござりましよ。此上とても岩藤様、憚りながらよい様に、足はぬ事を御遠慮なうお呵りなされて、お指圖頼み上げます」と、柳流しのしなやかに、云廻したる利發さよ。「オ、何ぢや、町人の娘故、足らぬ勝ちな勤方を、私に指圖してくれろ。ホ、オ、つべこべと薄い唇ぢやの。此方の若い其舌先で、こね返さるゝ私でもござらぬ。何のそもじの御發明で、私が指圖を受けさうな事かいの。コレ次手ぢやによつて云ひますが、此方の親元は、町人ながらも金持で、御屋敷の御金御用を勤めやるといふ、其用達顔の高慢が、鼻の先へぶら付いて、コレ此顔に見えるわいの。コレく、上の事いふではないが、金の威光はきつい物ぢや、アノ其角とやらいふ誹諧師の發句に、コレ聞かしやれや、口切や汝をよぶは金の事、コレ、金持頼は此上とても止めにして下され尾上殿、御役向はお中老、此岩藤は局役、お表ならば御用人格ぢやぞや。女子一通りの事は勿論、萬一

狼藉者が奥向へ切入るか、又盜賊などが忍び入る其時には、役柄ぢや、女子ながらも御前の固、討留める器量がなければ勤まらぬ奉公ぢやが、此方も武家方の御奉公さしやるからは、長刀の一手も心得てござらうの。ソリヤアノ、誰に稽古さつしやつたぞ、ソシテアノ其お師匠様は何と云ひますヤ。コレくく尾上殿、ア、爰な人わいの、人にばかり口たよかせ、此方は耳でも潰れたか」と、嚙み付けられて尾上は只、赤らむ顔を押し隠し、「お恥かしい事ながら、其心がけは」「無いといふのか。ヤレおとましや氣の毒や、重い役を勤めながら、役向の勤方を知らぬといふは、ソリヤアノ何ぢやぞや、オ、夫よ、本の是が祿盜人といふ者ぢやぞや、イヤコレ知行盜人といふ者ぢや。盜人ぢや、くくくく、何とさうでは有るまいか」と、捲しかけたる雜言に、無念の涙たもちかね、齒を喰ひしぱりこらへるる。「オ、何ぢや、泣かしやるか、オオちつとこたへう、悔しかろ。町人の娘ぢやとて、今では武家の御奉公人、本にさうぢやわいの。最前もいはしやるには、心付かぬ事有らば、御指南頼むといはしやつたの、ウ、ドレ教へてやろ」と立上り、持つたる扇振上ぐれば、身をかはして打落す。手向ひなさば一打と、懷刀抜き放せば、是はと驚く女中達、尾上も今はたまりかね、共に抜かんと立寄りしが、思ひ廻せば廻す程、大恩受けし御主人の、御先途も見届けず、我身に過有るならば、跡に残りし親

達の、御歎は如何ばかりと、こたへるつらさ苦しさは、胸も張りさく血の涙、身もうくばかり
 歎きしは、傍で見える目も哀なり。「相手にならぬは此岩藤が恐しいか、但しは又おくれたのか。
 遣は町人の娘なれば、刃物三昧は恐しい筈、怖い筈、オ、道理ぢや、くく、そんならコリ
 ヤ納めましよく。ドレくくく、歸りましよく。ホンニくく、此方にかよつて、
 コレくく、これ見さつしやれ、足袋も草履も砂まぶれぢやわいの。イヤコレ尾上殿、ヤ何
 と此草履のよごれたのを、拭いて下されぬか」「アノ私に」「オイノ」「エ、」「いやか」「ぢ
 やというて夫がまあ」「ホ、、、臆病者の腰拔に、刃物汚ししようより、幸な此草履」と、
 足にかけたる土草履、尾上が頭を丁々々、是はとばかり奥女中、氣の毒餘り立騒ぐを、尾上は
 聲かけ、「コレくく、騒ぐまい女中達、岩藤様が此尾上を、御異見の爲に御打擲、コレわし
 や有難うてく、母様の御折檻と申うて、此身のふしくまで、有難うて忝い。イヤ申し岩
 藤様、産みの親も及ばぬ御異見、エ、有難う存じまする。此上は随分と武藝をも心がけて、御
 奉公を致しましたよ。又此お草履は、私がためには御教訓の此一品、申し受けまして私が守
 と、懷中したる大丈夫、類希なる忠孝に、遣の岩藤呆れ果て、口をつぐんで居たりしが、「ヤア
 何ちや、其草履を私に貰うて守に掛ける、アノ守にや、テモ恐しい辛抱な人、異見した甲斐が

朝あさから晩ばんまで、針はり打うちしたりやり羽は子ご手て鞠まり、お雑ざつ煎せん腹はらのへるのも忘わすれた、ホ、ホ、ホ、御膳ごぜん仕廻しまへばお櫛くしにかより、お下さりまでの其その内うちに、繼物つぎものしたり時分じぶんの身仕舞みじまひ」「オ、お秋あきのいやるに違ちがひはない、人ひと一倍いちはい精せい出いだしても、部屋へや方者がたものと賤いやしまれ、好よい奉公ほうこうもする事ことならぬ、皆面々みなめんめんの肩かたづくぢや。此春このはるの出替でかひりには、出でて退のけうと思おもうたれど、ア、何國いづくも同おなじ鷄どりの音色ねいろと、重年ぢうねんをしたのぢや。どの白壁しらかべも同おなじ事こと、縁次えんし第ぢや」とさがな事こと、口くちもはしたの姦かししさ。主しうの噂うはさも鳥影とりかげも、日脚ひあしも延のびて八やッ下さり、お下さりのお迎むかひと、お初はつが夫それと氣きも浮うかぬ、小腰ここしかどめて、「コレハコレハ、皆打寄みなうちよつてお睦むつまじい、面白おもしろさうなお咄はなし、新參しんざんの私故そのなかま、其仲間そのなかまへは這入はいるまい、後のちにゆるりと逢あひましよ」と、御殿ごてんをさして行く所ところを、「コレくお初はつ殿どの、其方そなたも此方こちらが仲間内なかつまうち、マアア爰こゝへ」と呼よびかけられ、いやとも云いはれず惣々そうそうの、中なかへすわれれば差出さしでのおなか、「ホンニ此方こなたは仕合者しあはせものぢや、結構けつこうな旦那だんなを取とれば、勤つとめながらも骨ほねは惜をしまぬ。其方そなたの旦那尾上だんなおへうま様の心こころよし、何なにから何なにまで御發明ごはつめいな御生おうまれ、道理だうりこそ育そだちが育そだちぢや、お宿やどといふは誰有たれあらうぞ、鎌倉かまくら一番いちばんの大分限だいぶんけん、舟ふなが谷やつの坂間さかまとやらいふ米間屋こめごみや、少ちひさい時ときからお姫様育ひめさまだち、此このお屋敷やしきの御金御用おかねごよう、一いつ式しき親御おやぢが勤つとみやるけなの、人ひとは氏うぢより育そだちぢや」と、陰口咄かげぐちはなし腰打こしうちちて、負まけぬお冬ふゆが壺々口つばくぐち、「氣きにはかきやんな、おなかが御主人ごしやじんお局つばねの岩藤様いはふでさま、此この廣ひろい御殿内ごてんうち、誰たれ一人ひとりお睦むつま

じう相口あひぐちといふが根ねかららない。コレお初殿はつぎの、昨日鶴ヶ岡きのふつるの事聞きこいてか」「イヤ私は何も存ぞんじま
せぬ」「マア、聞ききや、お局様つばねさまと尾上様おのへさまと御同道ごどうだいで、御代参ごだいさんにお出いでなされた時とき、例れいのわんざ
んが出でたかして、有あらう事ことかはしたない、御用先ごようさきで悪口あくこうたら、まだ其上そのうへに大だいそれた、お中
老ろうもお勤ごみめなさる、此方こなたの御主人尾上様ごしゆじんそのへさまのおぐしを、主ぬしの草履さうりで敲たたいたといの。勘忍強かんにんづよい尾上
様さま、御代参ごだいさんなりやお上かみの名代みやうだい、じつところへて祕ひし隠かくしに、其場そのはは濟すんで仕廻しまうたけなが、ナ
ント思おもやる、聞きいてゐる内うち、かけ構かまひないこちとまで、腹はらが立たつてくくくく、夕ゆづべは癩しかが
差込さしこんで、お夜永よながをたべなんだ。苦くは色いろかはる松風まつかぜの、評判物じやうはんものぢや」と口々くちぐちに、謗そしる折柄せがら、奥
の間まより立出たちいづるは、顔かほも心こころも直すぐならぬ、曲まがりくねつた局岩藤つばねいほら、邊見廻あたりのまはしくて、「ヤイ、
女共をんなども喧やかましい、そりや何なにをいふ、次つぎへ行いかぬか、立たたぬか」と、呵しかられながら婢共はしたども、我部屋部
屋やへ立たつて行いく。「コリヤ、初はつ、我われにはちつと用ようが有ある、爰こゝへ来こい、怖こはい事ことはないわい
なう。来こいと云いはどおぢやいなう。アノ其方そなたは女共をんなどもを集あつめて、一いちはな立たつて何なんで人ひとの噂うわさいふぞ、
サアなぜ自みづから事ことを悪わるういやつた。何なんぞ意恨いこんでも有ある事ことか、又または尾上殿おのへぎのが悪わるういへと云い付いけたか、
サアもちつと爰こゝへおぢやいなう。どうぢや、どうぢやいなう」と、猫撫ねなで聲こゑも氣味きみ悪わるく、お初はつは
漸やう傍そばへ寄より、「イヤ私はたつた今参いまさんじまして、何なんにも申ます間まはござりませぬ。何なんも申ましは致いた

しませぬ、お赦ゆるしなされて下さりませ」と、行ゆかんとするを小腕こぶだ取り、「モウく夫それで知れた、奥おく聞きかうより口聞くちきけと、悪わるうぬかさぬ物を何赦なにゆるす事が有ある。アノ惡根性わるこんじやうの尾上おのへづら、主しやうが主しやうなら儕おのれまで、惡工わるたくみを仕しさうな死人しびにあま、佛性ほとけしやうな此私このわしを、ようもく無ない事ことまで拵こしらへて、なぜ云いひやがつた引裂ひきさかれめ。ドレ顔見かほみせよ、テモ好よい顔かほぢやナア、ム、好きい器量きりやうぢやナア」と、傍若無はうじやくぶ人に引寄ひきよせて、つめつつ突つきついじめられ、おろく涙なみだお初はつが思おもひ、誤あやりましたも出いでばこそ、只伏沈ぢふしんむばかりなり。お口女中くちぢやうの聲高こゑたかく、「お上屋敷かみやよりお使者ししやのお出いで」と案内あんないの、聲こゑに岩藤いははぢきよろく目め、「エ、うぬは仕合しあはせ者もの、只置ただおくやつではなけれども、好きい時ときのお使者ししや故赦ゆるしてくれ、立つてうせい」と怒いかりの立蹴たちけ、口惜くちし涙押なみだお隠かくし、しをくとして立つて行く。程ほども有あらせず長廊下ながらうか、のつかくと權柄眼けんべい、出向でむかふ岩藤いははぢ、互たがひに夫それと表向おもてむき、相口馬あひくちうまの會釋あひやくはらう、「オ、お使者ししやと有あらばどなたかと思おもへば大膳様だいぜんさま、御苦勞様ごくらうさまや」と互たがひの目遣めづかひ、仕込しこむ惡事あくじの友鳥ともがらす、したり顔がほに座ざに直なほり、「其以來そのいらいは打絶うちたえ申うした岩藤殿いははぢの、お使者ししやの趣餘おもむきよの儀ぎならず、持氏卿もちうぢやう御病氣ごびやうきなりと世上せじやうへ披露ひろうし、御賢息ごけんそくふたかた、惣領そうりやうたる花若殿はなわかのは花はなの方かたの出しゆつ生しやうなれば、御家督ごかどくとの御内意ないい、申まうし入れよ、後室君景壽院こうしつみけいじゆゐんの、今日こんにちの御口上ごこうじやう、斯かくの通り」と述のべにけり。「ム、すりや御家督ごかどくは花若様はなわかさま、申まうし、是これまで色々いろくの心盡こころづきは仇事あだことか」と、本意ほんいなけに問とふ詞ことばを打消うちけし、

「何にもせよ其方や我等が面白からぬ趣なれども、肝心かんもんの繼目の給旨、ナ、ナ、我等が方へ隠し置けば、花若の家督相續思ひも寄らず。シテ兼ての首尾は如何」と、密々聲も人や聞くと、邊を眺め岩藤が膝摺寄り、「サレバ其事、大切なアノ密書、日外問注所で取落し、ハツと思うて、色々と搜しても見えぬ密書、尾上めが拾うたとは、鏡にかけて睨んで置いた。スリヤ尾上めを其分に濟ましては、寢覺心がとんと濟まぬ。昨日鶴ヶ岡へ御代參、尾上めを同道、宜い折柄と思うた故、立ッつ居つにいじめかけ、ドウ喧嘩仕かけても、上手遣うて相手にならず、場所がらを辨へ、御代參の私へ對し、慮外有つては身の越度と、流す程に、煮ても焼いても喰はるゝ様な、大抵利發な女めではないわいの。詮方盡きて人柄を崩し、私が履いた草履を持つて、尾上めが天窓をくらはせ、手向ひさせうと思つた所、聞いて下され恐しいやつ、夫をも辛抱しくさつて、手持無沙汰に其場を仕廻つた。時に尾上めが婢に初といふ小あま、年に似合はぬ才はぢけの差出者、また此奴めに手向ひさせて、夫から尾上めに付込まうと思つて、今も今とてさんぐにいじめかけたが、是も又同じやうな辛抱強い賢い奴、手向ひどころか誤つてばかり居つて、是も又壺へは行かぬ。此分ならばなくもない、あいつを遠ざける事は成るまい。兼て此方の工みの様子、氣取つてを

るアノ尾上め、思案しあん借りたい大膳様だいぜんさま」と、毒氣どくき吹き込む一ツ息いき、焰ほのほとばかり身を焦こがす。大膳も諸手もろてを組み、暫しばしためらひ居ゐたりしが、「ム、はて扱さてしぶとい女をんなめ、並々なみ々の謀はかりごとに乗せらるゝ女ならず、ハテどうがな」と思案しあんのうち、襖ふすまの陰かげに婢はしたのお初はつ、様子やうすう窺うかがひためらふとも、知らぬ岩藤いはふぢせよら笑わらひ、「ア、仰山ぎやうざんな大膳様だいぜんさま、此家このいへを一香ひとのみにと企くはだつるお前まへや私わしが、アノ小尼こあま一匹いっぴきが、何なんで夫程それほど恐おそしいぞ。アリヤ堪たへ忍しのぶでも有あるまいが、眞實しんじつ生うれついた臆病者おくびやうもの、又またこれから模様もやうをかへ、あいつを追出おひだす其思案そのしあんは、お案あんじなされますな、コレ爰こゝにござりまする大膳様だいぜんさま」「ムム然しからば宜よきに計はからはれよ、きやつめ一人ほひまくれば、跡あとは野のの宮高砂みやたかさごの」「オ、アノ妾めかけづらは心好こころよし、大殿おほどのは死しんで仕廻しまふ、若殿わかどのの小びつちよ殿どのに、宛あてがひ扶持ぶちを喰くはせて置おけば、此一家このいっか中ちゆうはお前まへと私わしが」「シィ、聲こゑが高い、壁かべに耳みみ、岩いはの物云ものいふ世よの譬たとへ、互たひの胸むねはとくと祕ひめして、岩藤いはふぢ吉左きちさうを相待あひまち申まうす」と、浮うかべる雲くもの空頼そらたのみ、奥おくと表おもてへ時宜ときしき式禮しきらい、別わかれてこそは入いりにけり。跡見あとみ送りて襖ふすまの陰かげ、お初はつがそれと拔足ぬきあし差足さしあし、邊眺あたりのめて溜息ためいきつき、「テモ恐おそしい工たくみ事こと、お下さりの遅おそい故ゆゑ、どうかかうかと思おもひ過すこし、陪臣まいどのの行ゆく事ことならぬ奥御殿おくごてん、いて見みようとは思おもうたれど、咎とがめらりよか、呵しかられよかと、取とつてかへした襖ふすまの陰かげ、惡局あくつばねの岩藤いはふぢどのと、アノ伯父御おぢごの大膳殿だいぜんどの、大それた惡事あくじの相談さうだん、コリヤ大切たいせつな事ことぢやわいの。尾上様おのへさまに申まうし上げ、お上かみへの御ご

忠節、アイヤ／＼、證據も持たず、大切な事をなま中に、是を訴へてお主様を科に落し、どのやうな御難儀を懸ける工の程も知れぬ。私が大事のお主といふは、尾上様より外にはない、さうぢや／＼」と一筋に、恩義に迫る主思ひ、待つ間もとけしなが廊下、しづ／＼御殿を尾上が下り、夫と見るより、「オ、御機嫌よう今お下り、いつ／＼よりも遅いお下り、どうやらお顔持もすぐれず、お心悪うはござりませぬか」「アノ初とした事が、氣疎い物いひ、毎日々々の御前勤、下りの早い事も有り、御用が多けりや遅い事も有るは此上間々有る事、勝手知らぬ其方故、案じは無理ならず、サア供しや」と何氣なき、詞にそれと氣も付かず、上べを包む上草履、直す草履も昨日の意恨、思ひ惱みて一筋に、歩む廊下も心には、羊の歩み隙の駒、神ならぬ身の夫どとも、知らぬお初が物案じ、いく間も遠き長局、部屋の戸明けて内に入るも、常に變りし顔色を、悟らせまじと癢に紛らし、「正直はさつきにから、持病の痞が起つたわいの。夕飯も給べたうない、いつもの通りさすつてたも」「ハイ」とお初が差寄つて、「先お枕を遊ばしませ、お風召すな」とかい巻を、かひ／＼しくも立廻り、「お癢の起るもお道理様ぢや、夫に付けても輕い者は、奉公とても氣散じに、旦那様やら御家來やら、お友達見るやうに、お心安うなさつて下さりや、病氣もござりませぬ」「オ、いやる通り、上々方の宮仕へは、いかう心氣

を遣ふ物、其方の爺御は武士と聞いたが、世が世ならどのやうな御奉公も仕やる筈を、町人の娘の私が遣ふといふは、嘸や嘸心うくも思やらう。とかくに人は時節を待ち、花咲く春を待つのが肝心」「オ、勿體ない事御意遊ばす、何事も大旦那のお咄しに御存じならん、私親子が受けし御恩は、口にも筆にも盡されませぬ。せめてもの御恩報じ、不調法な此私が、お傍で何卒御奉公と、お願申し此春から、初奉公の御面倒、有難う存じまする、其大切なお前様が、御病身なを案じ申し、何卒お煩ひの出ぬ様にと存じますが、年はも行かぬ私が口から、ませた事をいふ小しやく者と、お呵りも有らうけれど、兎角に人は氣を晴らして、物に屈托をさへ致さねば、煩ひは出ぬ物ぢやと、功者なお醫者の申されましたが、其御養生には物見遊山、アノ、お前様も芝居はお好でござりませうなア」「オ、成程私も芝居は好ぢやが、其方も定めて好ぢや有らうが」「イヤモウ好の段ではござりませぬ、さう申す中歌舞伎より、操芝居の淨瑠璃が、私は面白うござります」「オ、夫なれば咄しが合ふ、私もきつい淨瑠璃が好、併したまゝの宿下りより外は、淨瑠璃本で樂しむばかり」「私もお屋敷へ上りませぬ其前は、よう見物に参りましたが、當り淨瑠璃も多い中に、アノ忠臣藏の淨瑠璃程、面白いのはござりませぬぞえ」「オッリヤ誰も同じ事、アノ師直頼の憎さく」「イヤ申し、お前様のお心には、鹽谷殿の師直

へ切懸けられし其所は、尤な事に思し召すかえ、但し又、不了簡な事に思し召すか、サマア
何と思し召します」「さればの、御短慮には有つたれど、意恨に意恨重る上は、御尤にも有
らうかいの」「イエ、く、憚りながら、ソリヤお前様の御最良口、鹽谷殿は大不了簡、ナ
ゼと御意遊ばせ、大切な身を輕々しく、短氣に其身を亡し給ひて、親御様のお歎、本に私とし
た事が醜相な、鹽谷殿に親御はないもせぬ物、ナニ何と覺し召す、家國を亡し、奥様始め御家
中散りぐ、たつた一人の不了簡が、千萬人の身にかよつて、御恩を受けた者共の、歎の程は何
何ばかりと思し召すぞいのお情ない。オ、阿房らしい何のこつちや、拍子にかよつてお前様へ
御異見の様に、オ、をかし。ドリヤお藥を見てこよか」と、何か詞に綾の絲、勝手へこそは立
つて行く。跡に尾上は胸せまり、忍び涙の淵も瀬も、明日は亡き名を白紙に、硯の海のそこは
かと、なき長文も跡や先、書置く筆の命毛も、露と散り行くはかなさを、絶入るばかり忍び泣
き、涙と共に書留め、草の文箱も浦島が、明けてくやしき意恨の草履、文諸共に文箱の、紐引
きしめて傍なる、手箱の中を形身分け、數も涙の玉櫛笥、細々しくも小文庫に、おもひ詰めた
る憂き涙、包むに餘る小風呂敷、中結ひしめて玉の緒も、今を限りの空結に、封もしどろにか
きくれて、思はずわつと泣く聲も、袖に包みし忍び泣。何心なく勝手口、お初は心いつきせき

と、煎じ上げたる藥鍋、片手に茶碗携へ出で、「サアお藥」と差出し、見れば包と文箱に、きつと目を付け、「コレハしたり、お心悪いに何處へのお文、お氣が盡きように何事」と、問懸けられてさあらぬ體、「イヤ此文は母様へ、急に上げねばならぬ文、此包大儀ながら、つい往て來ても」と物がるに、云付けられてもぢくと、どうやら濟まぬ今日のしだら、不承々々に、「アノ參れなら參りませうが、アレ御覽じませ、空合も曇つてくる、勝手がましう思し召しませうが、明日の事になされませぬか」「テモ初とした事が、如何に心安立とて、主の云付ける宿への使、明日の事にでもせいとは、如何に女の主なればとて、主の云付けを背きやるか」「イエイエ何の御意を背きませう、御持病の癩も發り、お顔持も悪い故」「イヤ癩氣はモウ直つた、日のたけぬ内早う行きや」「アイ」「何をうざくするぞいの、行けといはど行かぬか」「ハイ、只今參りますわいの」と、文箱取上げ次の間の、案じに胸も張葛籠、明けて出したる生木綿の、在所染なる紋付も、部屋方者の一てうら、帶仕直して獨言、「今日にかぎつて此お便行きともなうてく、尾上様のお身の上が案じられてどうもならぬ。昨日鶴が岡の喧嘩の様子、御殿一杯の取沙汰を御存じないか。私にまでお隠しなさるお心の程が、どうも私は案じらるよ。眞實底から大切に思ふお主の大事を、蟲が知らするとやらいふのぢやないか、ア、心元な

いく。御機嫌に違うても、往た振して往くまいか。イヤくく、どういふ急な御用やら知れぬ事をさうも成るまい。かういふ時の佛神様、さうぢやく」と塵手水、一心無我の手を合せ、「南無觀音様く、南無鬼子母神様く、お宿へ參つて歸ります中、主人の身の上頼上けます。ドリヤ一走に走つて來う」と、小褌りょしく高からけ、錠口さして出でて行く。影見ゆるまで見送りで、こらへくし胸の中、思はずわつと伏沈み、消入るばかり歎しが、やうくに顔を上げ、「まだ昨日今日、馴染もない此私を大切に、大恩受けた主人ぢやと、年はも行かぬ心から、大事に思うてくれる心、コリヤ、忝いぞよ、嬉しいぞよ。岩藤へ意恨を察し、さつきにも餘所事に淨瑠璃の譬を引き、私が短氣な氣も出よかと、云廻したる健氣な利發、今別れたが一生の、別れとは知らずして、嘸やとつかは戻つて來て、歎かん事の不便や」と、身も浮くばかりせき上げて、前後不覺に歎きしが、やゝ有つて顔を上げ、「父様や母様の、此年月の御不便がり、御恩は海も猶淺く、山より高き御恵み、片時忘れぬお二人様、此中のお文にも、母様の細々と、いかう此頃はおしなべて、引風の時行病、一しほ案じらるゝ程に、コレ此守は秋寺の、厄病除のお守、傍輩衆も多い事、悪い病の折見廻、移らぬ程に大事にかきや。又其上に身用心というて外にはない、給物に氣を付けて、氣鬱せぬ様に折節は、酒もたべて氣を晴し、煩はぬ

様、第一は御奉公大切に、又合樂の黒丸子、切れた時分と氣を付けて、モウ三年で御年も明く、
 御禮奉公を早うして、下りやるを指折つて待つて居ると、小さい子供か何ぞの様に、成人の此
 私を、大事がつてござる其中へ、アノ文を御覽じたら、何と身も世もあられうぞ。常に氣細な
 母様の、其場で直に死なしやんしよ。今死ぬる此身より、跡の歎を見る様で、胸もはりさく悲
 しさは、何の因果の報にて、親子の縁の薄墨に、書置く筆の逆様事、必ずお赦し遊ばせ」と、正
 體なみだせぐり上げ、身も浮くばかり取亂す。「ア、我ながら未練なり、女ながらも武家奉公、
 草履を以て面を打たれ、何面目に存へて、人に顔が合はされう、とは思へども大切な、御前様
 への忠義を思ひ、今まではながらへしが、此書置に委細の譯、伯父大膳の惡事の密書、命を捨
 てと上への忠臣、只何事も宿世の約束、最期のはれの支度して、一遍の經陀羅尼、唱へん物」
 と一間なる、佛間へさして日も西へ、夕日まばゆき空色も、磨き立てたる練堀作り、足利家の
 門口、文箱抱へて出るお初、形振見ずにいきせきと、行く向ふより二人連、何かぶつくさ咄し
 合ひ、来るもおはつが心の辻占、行違ひ様、「叶はぬくモウ叶はぬ、取つて返すがまだしもの
 事、可愛事をしました」と、聞く辻占にお初がはつと、見やる空には一群の、泊鳥の鳴き連れ
 て、最期を告ぐる魂呼ばひ、心細さも身にしみて、歩みもやらず立留り、「ア、氣にかゝるく、

辻占の今の咄し、烏啼の此惡さ、アレ／＼けしからぬ胸騒、コリヤお宿へは行かれぬわいの。
様子は知るゝ此文箱、封じを開き見てのけう」と、思ひ切つて封押切り、見れば包みし草履片
片、文取上げて押開き、「何ぢや、書置の事、コリヤ叶はぬ」と懷へ、一字も讀まず一散に、
御門の内へと三重入相の、鐘も無常を告げて行く。轉んづ起きつ廊下口、半狂亂のお初が仰天、
部屋の襖も案内なく、一間を見ればコハ如何に、朱に染みたる尾上が亡骸、抱上げて只うろ
ろ。「エ、しなしたり遅かつた、今一足早くばナ、此御最期はさせませぬ。コレ申し尾上様／＼、
旦那様」と、呼べと答へも涙より、外に詞もなき沈む。「ふえのくさを思ひの儘、かき切つ
てござる物を、何と答へが有る物ぞ。ナニ御前様御披露、ム、コリヤさつき、窺ひ聞いた
岩藤が密書、是さへ有れば御身のあかりは立つ、有難い／＼。コレ申し御無念の魂は、
まだ家の棟にお出でなされう。エ、聞えませぬわいなう／＼、昨日鶴ヶ岡で岩藤づらに、
草履を以てお打たれなされた、其取沙汰屋敷一杯、御家來の私が身で、口惜しう有るまい
か、無念では有るまいかいなう。女子にこそ生れたれ、私も武士の娘、御鬱憤を晴しかね
うか。夕べ一夜さまんぢともせず、今日とても思案とりぐ、モウ打明けてお咄しなさ
るか、今打明けてお咄しかと、見合はせて見てもお隠しなさるゝ、エ、不甲斐ないお生ぢやと、

傍で見る目の齒痒くて、さつきにも淨瑠璃の髻を引き、お心を引いて見れば、鹽谷判官の短慮な
も、無理とは思はぬ尤ちやと、おつしやつた時の其嬉しさ、其お心に張が有らば、天晴お手は
おろさせぬと、悦びは悦びしが、ひよつとお前が淨瑠璃の、鹽谷判官をなされてはと、慇懃とお
前をお宥め申し、透を見合せ岩藤を、一刀に刺通し、御恩を報じ奉らんと、思ふに甲斐も今宵
の有様。お書置の此面、追付け敵岩藤が、首引提けて御無念の晴らさしませう、必お待ち遊ば
せ」と、意恨の草履手に取上げて、打詠めく、無念の涙血を濺ぎ、凝り固りし烈女の一念、
義女の其名を末の世に、錦と替る麻の衣、女鑑と知られけり。夜も早初夜を告げて行く、お夜
詰觸の音冴えて、鐵行燈の光りさへ、いとど淋しき長局、胸撫でおろし手を組み、思ひ詰め
たる其眼色、氣も張弓の三日月も、入るさの影の暗紛れ、手水鉢に差寄つて、柄杓持つ手もわ
なわなと、救ひ上げたる水一口、恨みの草履片手には、血汐滴る尾上が懷劍、片手片足の早ね
たば、庭の千種に泣連るゝ、蛙の聲の物凄し。邊見廻し奥の間へ、眞一文字に三重駈り行く。
忍び入りたる奥御殿、折節人もとだえしは、天の奥へと猶奥深く伺ふ折柄、何心なく岩藤が、
出合頭は最究竟、待設けたる九寸五分。「中老尾上が召仕、主人の意恨覺有らん」と突ツかく
る。此方もしれ者身をかはし、「ヤア推參なる下司女」拉いでくれんと襠脱ぎ捨て、お初が利

腕むずと取り、組ふせんと金剛力、押せども突けどもひるまず去らず、一心凝つたる主の仇、かよわき力にふりほどき、付け入りく挑合ひ、「念力通す恨みの刃、請取り給へ」と名乗りかけ、柄も折れよと突通され、流石の岩藤七轉八倒。物音聞付け女中方、てんでに長刀引きそばめ、御前を守護し取圍む。次の間より大膳源藏、おつ取刀に駆け來り、此體見るより驚く大杉、大膳お初をはつたと睨め付け、「ヤア儕大膽者、御寢所間近く劒戟を振ひ、大老たる岩藤を手にかけし不敵の段々、一分だめしの刑に行ふ、覺悟ひろけ」と呼はる聲、漏れて奥より花の方、女ながらも天性と、備はる武威の功や、しづくと出で給へば、ハツとばかりに大膳大杉、仰は如何と控へ居る。お初は嬉しく岩藤を、心の儘にとどめの刀、報は早き斷末魔、心地好くこそ見えにけり。遙か下りて懷中より、一通取出し尾上が同席、藤江が前に手をつかへ、「此書付こそ主人尾上、心を込めし密書なれば、憚りながら御披露」と差出せば、「ソレ此方へ」と花の方、手に取上げて封押切り、奥より端を繰返し、見給ふ體にお初が安堵、「もう此上は片時も早く主人の供」と、既に自害と見えけるにぞ、「アレ停めよ」と花の方、仰に人々立重り、「御意ぢやく」にお初はハツと、恐入つたるばかりなり。花の方は氣色を正し、「ナニ源藏、思ふ仔細有るなれば、尾上が死骸目通りにて改めよ、早とくく」の仰に連れ、變り果てたる亡

きがらを、涙ながらに跡や先、女力のしをくくと、蒲團の儘に昇き出づる。源藏立寄り死骸引
 上げ、打返しとつくと改め、「相違なき自死、とくと見分仕候」と、申上ぐれば花の方、「ヤイ、
 初とやらん出かしたり、其場を去らず主の仇討留めしは、武士も及ばぬ忠臣の程、オ、神妙に
 も健氣なり。其忠臣を感じる餘り、今より取立て中老役、其名も直に二代の尾上、血汐に觸れ
 し彼が衣服、改めさせよ」と仰の下、世も廣蓋に一重、お初が前に差出せば、思ひも寄らずお
 初は只、伏拜みく、有難涙にくれるたる。大膳がむつと頬、源藏は詞を改め、「君々たるの
 御はからひ、感じ入り奉る。イヤナウ尾上殿、残る方なき御前の首尾、お羨しう存する」
 と、詞遣ひも早夫と、打つてかへたる折目高。お初は何と挨拶も、暫し控へてゐたりしが、恐
 入つて手をつかへ、「勿體なくも賤しい此身に、空恐しき御懇の御意、有難いとも嬉しいとも、
 申し上ぐる詞もなし。たゞ此上のお情には、せめて主人の菩提の爲、尼法師とも様を變へ、跡
 弔ひたき御願、偏に願ひ上げます」と、眞實見えし主思ひ、竝居る女中も俱涙、袖より袖や濡
 すらん。花の方も御聲曇り、「女たる身の鑑と成る、願の一條感ずるに猶餘り有り。去ながら、
 尾上が自害は私の意恨ならず、此の密書、イヤナニ此の書置、スリヤ其方が忠心も、仇を討
 ちしといふばかりで、主人尾上が志を立てやらずば、全き忠とは云はれまいぞよ。ナ、コリ

ヤ合點がいたか」と詞の謎、胸にこたゆる大膳は、空嘯いてさあらぬ體。敏きお初は心付き、
「斯くまで深き御惠、御意を返すも恐有れば、宜しくお請お取なし、源藏様」とわるびれず、お
めす場うてぬ取廻し、實に中老の役柄も、恥しからぬ風情なり。「いざ拜領の此小袖、早改め
て」と、女中の口々。お初は面目身に餘り、「お請致せし上からは、早速衣服改めて、御禮申す筈
なれど、せめて尾上が野邊送り、やはり此儘此の形で、供を御免の御願、偏に願ひ奉る」と、
道を立てたる貞實心、花の方も感心有り、「オ、しをらしき初が願、聞届けたり、勝手次第」と
仰の下、大膳は不興けに、「ナニ源藏、落著の上は片時も早く、見苦しき女が死骸、御殿の穢
片付け召され」と、云ふに源藏二の間の口、「イザ女中達、乗物をかき入れて、廣敷まで出され
よ」と、詞に随ひばらくと、涙拂うてかき上ぐれど、昨日までも今朝までも、お情受けし尾
上様、いたはしさよと女氣の、又取亂す咽び泣。お初は跡に引添へど、涙も限り盡果てて、歩
むも行くも夢の夢、胡蝶の夢は悟れども、悟りかねたる愛別離苦、會者定離ぞと定なき、夜半
の嵐に花散りて、惜しや可愛や手向草、主は消ゆれど名は朽ちぬ、忠臣義女の道廣く、館をは
なれ三重出でて行く。

第八 道行戀の幻

なき影の、絶えぬも同じ涙川、寄るべ定めぬ浮船の、甲斐なきえにし薄雲に、幻衣のはかなさも、餘所は眺めの櫻時、月と花との二人連、結ぶとすれど解け易き、撚片絲に縫之介、消えにし露の道芝が、なき魂慕ふ戀衣、思はぬ人を身にかへて、立てる心の操姫、ならはぬ旅の妹背鳥、鎌倉山の朝まだき、霞とともに日をこめて、世を忍ぶなる形振も、曇り勝なる花曇、胸の曇も晴れやらぬ、思ひの影の鏡山、近江路さして行く空も、片思ひなる中津川、檜上坂もいつしかに、漏らさぬ水の桶啜、戀の重荷のうき寢鳥、君におほ田の戀中も、深き鵜沼の宿越えて、末の松山長柄川、御影寺の誓蔭頼む、今の憂き身をくいせ川、六の渡りの舟呼ばひ、いつしか花の心とけ、互に思ひあを墓の、其中山のさどめごと、言はぬ色なる床の内、實の一つだになき花の、氣強いお方と目に漏ると、涙にせぐり關川の、寢物語のうさつらさ、結ばぬ夢もさめが井に、番場鳥居本打過ぎて、流るゝ日脚よどみなき、越知川にこそ著きにけり。姫は猶更行き悩み、只さへ旅は憂き物と、其言種もまして又、人目忍ぶの憂き旅と、胸もせまりし露涙、しをると花の一しぐれ、「オ、道理々々實誠、踏みもならはぬ道もせに、世を忍ぶ今の憂き身、

道行く人の今教へし、越知川と云ふは是で有らうが、折も折と渡しも絶え、ハテどうがな」と
見やる向、岸に添うたる笹船を、是幸ひと嬉しさの、堤傳ひに聲はり上げ、「ナウく其船へ
物申さん、急ぐ旅路の足弱を連れ、渡しもたえて難儀致す、浮世の情渡ししたべ、なう船人」と
と呼子烏、覺束なくも夕霞、一圓の心火炎々と、立覆ひたる笹舟の、内には花の立姿、世をう
き船の枕枕、戀中川の深き瀬も、朝妻船と世の夢の、覺めてはかなき道芝が、馴れし廓の一つ
まへ、著つと馴れにし水剛棹、指す手引く手も全盛の、里の姿を其儘に、影を三つ瀬の渡し守、
見るや二人も夢現。撫ア其方は道芝ぢやないかいの、ホンニさうぢや道芝殿、不思議な所で」
道「ア、コレく必ず鹿相云ふまいぞや」舞「ムウ何とも不思議晴れやらぬ、今は此世になき人
の、此浮船に此姿は」道「夢ぢやわいな」舞「ヤア何と」夢幻の有りや無し、露置く日陰稻妻の、
光待つ間の仇し夢、憂き川竹の底深く、浮みもやらぬ流れの憂き身、憂いぞつらいぞ勤の習ひ、
烟草呑んでも喜世留より、咽が通らぬ薄煙、泣いて明かさぬ夜半とてもなし、人の詠となる身
はほんに、しんくまんくの苦の世界、四季の紋日は小車や、先春は花のもと、手折りし枝を樂
しみて、床に詠むる春の風、そよりくと花吹散らす、ちらりくと櫻の薫り、野山を寫す里
景色、夏の曙有明の、つれなく見えし別れ鳥、ほぞんかけたと囀るは、死出の田長や、冥途

の鳥と泣明す、籠の鳥かや恨めしや、秋の夜長に牡丹花の、燈籠踊の一節に、残る暑さを凌が
 んと、大門口の黄昏や、いざ鈴虫を思ひ出す、つらい勤の其中に、可愛男を待ちかねて、暮ま
 つむしを思ひ出す、蟲の聲々可愛らし。我が住家は草葉にすだく、露を枕にさはらば落ちよ、
 泣いて夜毎の妻ほしさうに、殿御戀しき機織虫よ、露を枕にさはらば落ちよ、泣いて夜毎の妻
 ほしさうに、晝は物憂き草の蔭、冬は落葉に、戀の山道踏分けて、染木々々には、草葉も枯て
 サイナく、君が心に木がらしの、踏分て染木々々には、草葉も枯れて、サイナく、君が心は
 木がらしの、草に吹きしく朝の霜、木の間のしづく置きそへて、イザ此方へとゆふ暮の、茜さ
 す日もそめいろの、山の端隠れ諸羽がひ、手に手をとりの夕告時、姫はやらじと留むる袖、引
 きぞわづらふ花と花、顔に照りそふ楓の綻び、裏吹く紅の夕紅、裳はらく散りかふ風情、は
 てしなは手の一筋を、二道かけしあだ櫻、散行く影の花の吹雪、花の鏡の川の面、跡しら浪も
 夢の夢、覺めてはかなき 三重。

第九

夢の世に、年經ぬる身は老いにきと詠じたる、大宮人の言の葉に、鏡山の里離れ、軒も疎の片

廬、門に懸けたる看板も、世のたつきなる占やさん、墨色薄きかせ世帯の、春の寒さを袖屏風、
肘を片しき轉寢も、在所淋しき侘住居、馴れていつしか操姫、寢すとすれど自ら、鄙に目馴
れぬ棲はづれ、差寄つて、「コレ申し、又お風召さうぞえ、申しく」と揺り起され、やつと目
覺す縫之介、「ヤア道芝か、死んだと聞いた其方がマア、何として此有様」「イヤ申し縫之介様、
そりや何と御意遊ばす、ムウこりや夢を御覽じたの」「ヤ本に夢で有つたか」「道芝ぢやないか
とは、マ面白さうな」「サア變つた夢ぢや聞いてたも、其方と私が鎌倉から、爰へ来る旅の空、
越知川の渡場で、道芝が幽靈に」「オ、怖」「オ、怖い筈く、其方と二人此私を、我夫ぢや我
夫と、競り合つた夢見たは、執著深く迷うて居るか、可愛や」と、云ふ顔熟々うち眺め、「同じ
女に生れても、思はるゝ身と思はれぬ、身は夫程に違ふかえ。道さへ分かぬ深山路の、木々に
も花は咲くもの」と、ぴんと尻目は有りふれし、涙ぞ戀の戀ならん。聞くにもじく縫之介、手
持無沙汰の折も折、立出づる畑介が、「イヤ申し若旦那、世を忍ぶお身の上で、端近の轉寐、今
にも主が戻つたら呵りましょぞえ。又操様も操様」と、心付くれば縫之介、「本にさうぢや、十
内の歸らぬ内奥へ行き、サア其方もおぢや」と手を取りて、わりなく見えし妹背中、打連れ一
間へ入る跡へ、浮世とは、今ぞ身に知る十内が、心のしがく内證の、工面の胸も晝下り、とつ

かわ戻る我家の軒、内へ入るより邊を眺め、「コレハ、畑介様、嘸お待ちかね、かのお二方は」
「ア、イヤお二人は今奥へ」「夫は重疊々々。扱内證の工面に、方々と歩いて見たれど、モ行かぬは金、兎角頼みはお前の占。ヤとやかう云ふ内まう晝過、お客達も来る時分、御苦勞ながらいつもの通り」「オ、合點ぢや」と押入の、戸を押明けてそろく、這入り四這跡引立て、煙草くゆらす納め顔、折柄ひよかく表口、ぬつと這入つて、「頼みませう、庄屋の作左でござる、十内殿はお宿にか」「ホコレハ、御遠慮深い、萬事お世話に成りまする私、御案内とは」「イヤイヤさうでおりやらぬてや、何程今落ちぶれやつても、親父の代までは此村の長百姓、親御の代に身上仕纏れ、打續く不仕合に、親達始め内儀まで、ばつたく死果てられ、乳香子の娘を連れ、知邊が有るとて鎌倉へ下られたに、又此春は内儀の年忌と、奇特にも戻られて、終づるくと在所住居。何とマア、アノ結構な鎌倉に居馴れた身で、片田舎の在所住居は、小淋しうて嘸わるかる。ヤコレ、少し又此方の内へも咄しにござれや」と、奥底もなき深切咄し。「コレハ、御馴染とて、御懇切なお詞、今おつしやります通り、私も鎌倉の縁者を頼み、おれ是とする中にも、娘一人を心の樂み、其娘めも成人致し、今は鎌倉の管領様の、奥女中へ奉公仕りますれば、身がいっしんの今の氣散じ、夫に又此程は、鎌倉の縁者共より、據ない夫婦連の掛人」と、聞いて此方

つとマア薄^{へた}と成^なり、ふがく^くに成^なつては濟^すまぬが、若^もし又^{また}夫^{それ}も外^{ほか}のやつが焼餅^{やもち}で、藁^{わら}を焚^たいて邪魔^{じま}するの^のか、そこがとんと分^わくらぬ故^{ゆゑ}、此^{この}占^{うらなひ}が見^みてほ^ほしいのぢや」「是^{これ}はく、先^{まづ}以^{もつ}て風流^{ふうりゅう}な面白^{おもしろ}いお願^{ねがひ}ぢや。シテ邪魔^{じま}仕^{まし}さうな其^{その}わるは、お心當^{こころあて}がござりますか」「サレバく、其^{その}邪魔^{じま}方^{かた}めは武佐^{ぶさ}の宿^{しゆく}の間屋^{まゐや}めぢやが、心底^{しんてい}行^いかぬやつぢやて」「ム、武佐^{ぶさ}の者^{もの}とおつしやれば、爰^{こゝ}から方角^{はうかく}はかうく」と獨言^{ひさりごと}、「丁^{やう}ど辰巳^{たつみ}へかゝつてゐる」「コレくソリヤ何事^{なにこと}を云^いはしやるぞいなう」「ハイヤ、私も此間^{この}間は、アノわろに八卦^{けいこ}の稽古^{けいこ}、夫^{それ}で方角^{はうかく}を考^{かんが}へました」と、ぬらりくらりも世渡^{よわた}りの、筈^{はず}を合^あはせる折^{せり}こそ有^あれ、一^{ひと}目^めにしるき鎌倉^{かまくら}武士^{ぶし}、家來^{けらい}引連^{ひきつ}れ權柄^{けんぺい}眼^{まなこ}、案内^{あんない}もなく内^{うち}へ入^いり、「跡^{あと}の村^{むら}にて噂^{うわさ}に聞^きいた、正銘^{しやうめい}見通^{みとお}し占^{うらなひ}者^{もの}とはお身^みがことか、大切^{たいせつ}なる尋^{たづね}者^{もの}、詮方^{せんかた}盡^つきた折^{せり}に幸^{さいはひ}、一算^{いつさん}頼^{たの}む、ソレ早^{はや}くく、サア早^{はや}く占^{うらな}へ」「是^{これ}はくお歴々^{れきき}様^{さま}、お急^{いそ}ぎの樣^{やう}子^すなれども、カノ占^{うらなひ}者^{もの}只今^{ただいま}は宿^{やど}に居^をりませぬ、モウ今^{いま}に歸^{かへ}りませう、イザ是^{これ}へ」の挨拶^{あいさつ}に、遠慮^{えんりょ}荒^{あら}しこ打連^{うちつ}れて、上座^{じやうざ}にむすど押直^{おしな}り、「身^みが事^{こと}は定^{さだ}めて音^{おと}にも聞^ききつらん、鎌倉^{かまくら}足利^{あしかが}殿^{どの}の御内^{みうち}において、原田^{はらだ}軍平^{ぐんへい}實永^{さねなが}といふおれきく、管領^{くわんれい}家の弟^{おとうと}縫之介^{ぬのすけ}といふ徒^{いたづら}者^{もの}、細川^{ほそがわ}家の息女^{そくぢよ}操姫^{さうめ}、夫婦^{ふうふ}連^{づれ}の駈落^{かけおち}者^{もの}、八卦^けの面^{おもて}に考^{かんが}へさせ、行衛^{ゆくゑ}尋出^{たづねだ}すにおいては、褒^ほ美^みはきつと山吹^{やまぶき}の、黄金^{こがね}の花^{はな}を咲^さかせてくれん」と、髭撫^{ひげなで}上げし緩^{ゆる}怠^{たい}頼^{らん}、始終^{しじう}の樣^{やう}子^す十内^{じふない}

が、聞濟まして立上り、押入の戸へ相圖の咳、戸棚の中をそろくと、後へそつと畑介が、廻つて出づる表口、何氣ないしう通しの魂膽、内入機嫌にこくと、「ホ、ウ作左衛門様、お侍様、どなた様も御免々々」とお家の真中、包おろせば十内が、「サテく今日遅い戻り、此お二人も最前から、貴公の戻りをお待ちかねぢや」「ハイ、イヤモ今日は廊の門を這入るや否や、ヤレ待人よ失物よと、煙草一ぶく吞む隙なく、ヤレくえらう草臥れた」と、包解けば十二銅、見るより庄屋は呆れ顔、畑介は會釋して、「イヤ申し作左様、先お前様から見ませうと、算木取出し鹿爪らしく、「ハア、コリヤむづかしい卦ぢや、色道トチナンピンといふ卦ぢや。色事と見えまますわいな」ヤア、あの私が願が色事と見えまますかいの」見えんとも見えるとも。しかもコリヤ外から焼餅で、悪い病が有るというて、お前と縁を切らうとしをるやつが有る」「ヤア其焼餅まで見えまますかいの」「見えんともく。其邪魔するやつの方角は、エ、辰巳の方、武佐の邊の者で有らう」と、戸棚で聞いた一通り、云並べられ、「テモ扱も、氣疎いは、是程にまで合へば合物か、ヤレく怖い見通し、モウくお暇申しませう、皆様是に」と云捨てて、我家を指して歸りける。跡見送つて軍平は、さもいかめしく膝摺寄せ、「見通しと有れば、此方より申すに及ばず、占ひ申す其一件、見通してくれめせ」と、頼みかくれば畑介

は、著木取出し押戴き、暫し考へ居たりしが、横手を丁と驚く顔色、見るより軍平氣をいら
ち、「イヤ何先牛、殊の外の御驚、如何の儀なるぞ、早く様子を聞かし召されい」「サア、扱
氣の毒千萬、全體此卦が首落損といふ卦で、變爻は離の卦に當つて中切れたり、何でも物の離
れる心ちやが、何ぞ心當がござりますか」と、問はれて軍平諸手を組み、小首傾け居たりし
が、「ハア、奇妙々々、某鎌倉を踏出す時、我等が女房は懷胎、又祕藏の三毛猫、こいつも
懷胎、相孕は天地開闢の忌言と、孫子吳子も云はれしが、兎角是のみ氣に懸る、片時も早く
卦の面、占召され」と氣を急いたり。「サア面をいへば斯うでござんす、お前は生得正直な、
善い人で有るけれど、生れ付いて欲深く、惡人に一味して、大切なお主様を、縛れ括れと鵜の
目鷹の目、惡人に方人なさんす故、天道の憎しみで、遠くは三日、近くては今宵中に、お前の
首は落ちるぞえ」「何と、すりやあの天道様の憎しみ故、此軍平が首は今宵中に、すほんと落
ちるかな」「如何にも左様」「スリヤ此首が、ハア、エ、能くも武運に盡き果てし」と、目に持
つ涙ほたくく、齒の根も合はぬ風情なり。畑介猶も頭に乗つて、「オ、悲しいは尤ぢや
が、まだ氣の毒なことが有る。お前の内儀もお前に似て邪見な故、殊の外な難産で、いかう苦
しんでござるが、命の程が危い」「ヤア、夫はマア本かいの、是なう」とばかり

にて、わつと聲上げ泣出す。「ア、コレく、まだ有るく、お前の祕藏になさんす三毛猫も」
「夫が何と致したえ」「サア六月二十九日の夜、犬に噛まれて死んだと見える。サテく氣
の毒千萬」と、聞くよりいつそ涙も留り、ぎつくくとしやくり泣、雨氣上りの褓、灸を
するたる如くなり。「オ、道理々々、其様に思はんす事なら、祈禱でも、ア、イヤく、ま
だまだお前の氣が直らにや」「ア、申しく、モウく、是切にとんと心を入れかへますわい
な」「スリヤ眞實惡心を翻す心かえ」「是がまあ翻さずに居られませうかいな。イヤ申
し、此首の落ちぬ様、祈禱してさへ下さらば、死んでも御恩は忘れませぬ」「ム、其心なりや
私も又、首の落ちる災難を、祈り退けて進ぜる心ぢやが、此祈禱は一通りの、安い初穂では祈
られぬ。先神前の飾付、供物の數が日數に表し、三百六十四品を飾り、綾や錦の水引戸帳、神
酒も並酒は成らぬなり、伊丹劍菱男山、菰被の數十二樽、是も十千の數に合せ、青幣には青
ざし百貫、白幣には南鐐の、雪の白銀花を咲かせて、大三寶へ山盛に、是を獻じて米屋に酒屋、
薪代家賃、節季々々の溜りおどもりくさぐさの、かより穢と科戸の風や八重の鹽路、日向のを
どの橘の、甚だ早き潮を以て、祓ひ給へと穢はすれば、其罪科の災難障り、さつぱり祓ひ捨
てさへすりや、首落の難受合うて、除いて進ぜる我法力、斯くの通り」と出放だい。「ハ、ア驚

入つたる貴公のお詞、此上に何疑ひ、御存しの通り旅の空、有合せたる路銀の有るだけ、斯くの通り」と懷中の、打違より小判三兩、おづくと差出し「是は至つて些少ながら、お初穂の眞似事、先何よりは急難の、首の所を御祈り」と、四角四面に相述べれば、畑介は不承々々、「コリヤ何ぢや、たつた三兩、大層な祈禱を云付けて、たつた三兩の目腐り金では、先此方は得致さぬ。脇をお頼みなされませ、おいとし様や」と入らんとす。「ア、申し、是非々々祈禱を頼むぞとよ」「イヤ、とても是では祈られぬ」「夫は餘りお胴欲様でござります」と、ぐんにやり軍平思案を廻らし、「ヤナニ、コリヤ、コリヤヤイ、家來共やい、わいらも今聞く通り、主人の災難救ふは忠臣、違背有るまい。其方共が嗜みの、路銀を何卒貸してくれ」「何がさて、主君の爲と有る事なら、何しにいなみ奉らん」と、てん手に出す懷の、壹歩貳歩を取集め、「御覽のごとく家來眷族、取集めました所がやうやく壹歩が、ハア一二三四五、ハ一六歩ござります。御受取り下されて、よきに御祈念願上奉る」「オ、此上は障りなう、武運長久御祈り申せば、お氣遣は少しもなし、目出たう受納致した」と、聞いて軍平氣も落付き、「ヤレヤレ今は心もさつぱり、少と夜の明けた心地せり。然らばお暇」「早お出でか」「委しくは鎌倉より、おさらば」「さらば」も門の口、きほひ勇んで立歸る。跡に二人は寄りこぞり、「テモ味

いお客がとれて、今日は思はぬ好いまうけ、祝事にお神酒上げう」如何様まんの直つた目出た酒、肴は私がして置かう」「そんなら酒屋へ一走り、いて來ませう」と畑介は、勝手見廻し缺徳利、とつかわとして出でて行く。憂かりける、世も引替へし今の身の、花咲く春にあふみ路へ、鋤乗物の光りさへ、名も照添へし鏡山、古郷へ歸る唐錦、油簞掛けたる挾箱、對の六尺打物も、所目馴れぬ供廻り、駕脇の小侍、門口に小腰を屈め、「卒爾ながらお尋ね申さん、十内様には御在宿下さるや。鎌倉より御息女様、只今是へ御入り」と、聞くに驚く十内が、表を見れば美々しき其體、不審晴れねばにじり寄り、「見ますればお歴々の御女中様を、娘に持ちし覺はなし、定めて夫は人違へ」と、云ふ間に夫と表の方、駕前にひざまづき、「御賢父様御在宿、イザ御對面」と駕の戸を、明くる間疾しと立出づる、お初も今は咲く花の、世に開きたる出立榮、彌生時服の合白に、三千年祝ふ桃色の、打掛姿たをやかに、しづくと打通り、我家ながらも面映く、父の前に手をつかへ、「先何よりはお爺様の、御機嫌のお顔を拜し、お嬉しう存じまする。付きましては私事、思ひ寄りぬ身の出世、譯はゆるりとお咄し申さん。遙々と鎌倉より、長の旅路のお土産とても、心ばかり」と詞の下、飾立てたる白臺に、沙綾縮緬の巻物を、目通りに並べ置く。十内は默然と、手を拱きて居たりしが、さも不思議氣に顔打眺め、

「ムウ驚き入つた出世の様子、土産物の美々しさ、子細こそ定めて有るらめな」「アイ其子細と申しますは、大切な尾上様、岩藤と申す局役に辱めを受け給ひ、アノ御自害なされましたわいなア」「ナニ御自害なされしとや、シテく其跡は如何ぢやく」「大恩受けしお主の敵、其場を去らず御殿にて、岩藤を討止めましてござります」「何ぢや、當の敵を其場も去らず討止めしとや。ム、適手柄、出かしたく。扱又出世の其譯は」「サア其敵岩藤を討止めし御褒美とて、尾上様のお跡役、中老役にお取立て、名をも二代の尾上と下され、冥加に餘る此身の出世、まだ其上に有難い御意には、お前の事までお尋ねの上、出世の姿親にも見せ、悦ばすが孝の道ぢや、諺にも古郷へ錦を飾る其本文、三十日の日數のお暇、遙々と尋ね登りし今日の今、何に譬へん嬉しさを、御推量遊ばせや」と、功成り遂けし悦びは、涙に含む其風情。聞く親の身は猶更と、思ひの外に十内が、顔色筋をあらよけて、「スリヤ敵討つた其褒美、其身に咲かす花の出世、其方嬉しいか。人たる者の立身出世、願はぬ者はなけれどもな、爰な道知らずめ、今我が云並べたる忠臣顔の立身出世、忠の道に似た畔道の、是を名付けて横に歩行く蟹忠の道といふわいやい。コリヤよつく聞け、誠忠義の譽といふはな、御敵を討亡し、御主人を助け参らせ、其身も君に取立てられ、君臣共に全うして、目出たく君に仕ふるを、立

身とも譽れとも、人も譽め名をも残す、大恩受けし大切な御主人、敵の爲に自害なされ、其敵討つたはよけれど、御褒美とて取立てられし、其御主人は何人ぞ。儕が主人の又御主人、如何に御意が重いとて、陪臣の身分として、直参と成つて主人の跡役、主の名まで下されたとして、よし／＼と其名を名乗り、いかめしげに忠義呼はり、第一が御主人へ無遠慮、コリヤヤイ、何程主の主ぢやとても、我が主ではない、其方が御主人ではない、我が主人と頼みし人は、自害なされた尾上様なるわやい。外の主人に取立てられ、嬉しいの有難いの、譽れぢやの手柄のと、名聞振つた賣物忠義、心有る人々は、爪はじきして笑ふはやい。畢竟主の不仕合が、其方が爲の仕合と成るは、お主の災難が家來の身の吉事と成つた無理出世を、儕はきつく嬉しいかいやい。形は産めども其様な、根性には産付けぬ。オ、出かした忠義者ぢや、其性根から身に纏ふ、古郷へ飾る錦の袖も、身共が眼からは綴と見える。乞食め、非人め、其腐つた魂で、ひけらしにうせた人畜生、見るも中々忌ま／＼しい」と、竝べ立てたる土産の巻物、立蹴にはたと蹴散し／＼、一句一言道理の道理、云詰められて一言の、返す詞もなき入るばかり、涙の外に答なし。傍に聞きゐる附々は、「シヤ法外者赦されず」と、反打ちかけて詰寄るを、「ア、是々慮外せまいぞ。今お呵りの其一々、此身の上にひしとこたへて、御返答に詞もない。騒いで見苦し

い、控へて居よや」と押鎖め、制せられて附々も、鎖りかへつて控へ居る。尾上は猶も恐入り、「お腹立の」々々、さらく無理とは存ぜねど、是を斯うとの云譯は、親にも打明けて、云はれぬといふ大切な尾上様のお志、立てる忠義は神ならで、外に夫ぞとしら露の、心の内のせつなさを、宜きに推量下され」と、涙に咽び詫びにける。「親に云はれぬ忠義といふは、ゐるな事では有るまいく、名聞欲の立身出世、出かし顔の忠義穿鑿、勘當ぢや、出てうせい」「エ」「イヤサ勘當したは大恩有る尾上様の御兩親へ、せめてもの身が云譯、大切なお主を失ひ、娘めが其代に、褒美の出世致せしと、どの頼下けて何面目、勘當は愚な事、生替り死替り、五百生も生をかへ、又と面は合さぬぞ」と、義に凝りせまる一徹の、裏は子故の悲しき恩愛、見せじと隠す親心、裏の裏なる節義の涙、まぶたを洩るゝばかりなり。云詰められて詮方も、詞なくく表に向ひ、「コリヤ皆の者、道々も云聞かす通り、大切な御用承り、尋來たりし其譯を、勘當請けしアノ父様へ、一通り申し談ずる其間、次の村代官が方に控へ居て、暮を合圖に迎ひの節、云付けた品持參せよ」ハツと受けたる家來共、跡の村へと急ぎ行く。折柄戻る畑介が、來かゝる門に立聞の、内の様子を窺ひ居る。尾上は詞改めて、「何申し十内殿へ、足利家よりの上使」「何御上使」「アイ、上使でござります」と、さも重々しき其勿體、「管領家の

加賀見山舊錦繪

めは是の掛人、畑介と申す居候。してお前様は何御用で、お出でなされたお方様」と、何喰はぬ顔知らぬ振。「ムウ此家の掛人と有るからは、アノマアお前様が聞及びました、畑介様でござりますか。存ぜぬ事とは申しながら、無禮の段はお赦し」と、會釋こほして手をつかへ、敬ひかし付く其風情。「ア、申しく、これはマア何とした迷惑、モシエ、私めは其様に、お歴々のお前方に、結構な御挨拶受けまする者ぢやござりませぬ」と、身をうぢくとかどみ居る。「子細お咄し申さねば、御合點の参らぬ筈、私事は十内が娘、初とまうします者でござります。様子有つて取上げられ、この身分とは成りたれども、親十内が御主人、主膳様の弟御様、御流浪の御様子も、よう存じて居ります。人の流と水の行末、飛鳥川の淵瀬定めなく、御家來の娘が御主様と肩を並べ、其弟御様が、其家來の世話にお成りなさるといふも、時世とておいとしほや、世は小車の浮き沈み」と、かこち涙の優しくも、心を汲みし詞の色、畑介もしをくと、差俯向いて居たりしが、「テモ扱もく御深切忝い、とは云ふものの昔は昔、今は今の其方の身分、家來あしらひはマア是切。ナニお女中様、アノ水鉢の山吹の花、人の身に譬へていへば、やもめ女見る様なもの、ナ、何と思し召しますえ」「アノ山吹を人に譬へ、やもめ女子見る様なとは」「ムウ、七重八重、花は咲けども山吹の、實の一つだになき

ぞ悲しき。サア、其實の一つだになき花の、香は深うても實がなうては、先祖へ對し大の不孝」
「アおつしやればそんな物、盛り短き人の身なれば、誘ふ水有らばいなんとぞ思ふ、世を萍の
思ひのたけ、畑介様、お前は何と思し召す」と、言はぬ色なる山吹の、口なし衣主や誰。畑介
はうつかりと、現心に、「何が何と、身を萍の其のよるべも、誘ふ水有らば誘はれて、流れてく
るお心かえ」「サア、マア心は心なれど、浮氣がちな男心、是ぞと見ゆる心中を見ねば」「返事
のならぬも尤、イザ心中をお目にかけん」と、云ふより早く腰刀、抜きかくれば、「ア、コレ
申し、そりや指をお切りなさるか、是は又お前も初心な、若輩な心中立、オ、阿房らしい」「ム
ム指切るがお氣に入らずば、腕を突かうか股を突くのか」「イ、エイナア、私がお前にお望み
申す心中は」「サア其心中は」「お前のお首が貰ひたい」「ヤア何が何と」「サア二つないお命が
心中に貰ひたい」「ム、コリヤ面白珍しい、類のない心中ぢやはえ。其又命が心中にほしいと
云ふ、其方の心は」「サア其心とて外にはない、コレ此小柄が其心」と、投出したる覺えの小
柄、見るよりぎよつと畑介が、手に取上げて見て恟り、「ナニ此小柄が心中を、望むと云ふ其
譯は」「ソレ其小柄御覽じたか、足利家の御重寶、家彫の二匹獅子、紙崎の家へ拜領有りしは、
世の人の知る所、先君持氏卿御病死とは偽り、日外仁木が騒動の節、相摸川において不慮の御

難儀、何者とも知れず持氏卿の御召の馬の足を切り、御首を討つて立退きし、其曲者が取落せし、二匹獅子の其小柄」「エ、スリヤ持氏卿には御病死ならず、相撲川にて御落命、ホイ」ハツと覺えの小柄睨み詰め、諸手を組んで「一息」オ、當惑なさんすも無理ではない、假初ならぬ命の心中、此場で夫と、ついちよつと心中も見せられまい、暮を限りにお前の心中、待つて居りますぞえ畑介様」と、詞の目釘鯉口も、しめて小柄の判物、一間へこそは入りにけり。跡には一人畑介が、取つ措いつの一思案、暖簾の陰に縫之介、姫諸共に窺ふ體、夫と見るより思案を極め、「四も五も喰はぬ上使の女、縫之介が首討ちに來たと云立てて、實はおれを仕廻ふ氣で、爰へうせたアノ女、コリヤ大事に成つて來た。先を越されては後手に成る、ちつとも早く縫之介が首を討ち、かねて手筈の軍平を以て、大膳様へ差上げん」と、大だら腰の不敵の畑介、奥をさして窺ひ足、イデー討と納戸口、べつたり行合ひ顔見合せ、明いた口へ「二人が細首、覺悟ひろけ」と切込むだん平、さ知つたりと受流し、「主に刃向ふ人非人、切先に覺えよ」と、丁ど打つたる刃先と刃先、姫は危さ氣も絶えく、剛力の畑介に、切立てられて縫之介、ひるむ所を姫諸共、膝に引敷き剛氣の畑介、捻伏せく、怒のどす聲、「ヤイ二人共によう聞けよ、十内初めわいら二人へ、貞節に見せかけて油斷させ、首討つて大膳殿へ進ぜる心で、鎌倉へ飛脚を立

て、檢使に呼んだア、軍平へ、今首にして渡す程に、覺悟せよ」と覺えの業物、如何は仕けん切りはづせば、刎返して縫之介、畑介が左の脇腹突通せば、うんとばかりに倒れ伏す。音に驚き十内も走出で、「コハ何事」と押隔つ。「妨すな」と打拂ひ、止め刺さんと立懸るを、「ヤレわかだないましは、早まり給ふな只一言、申上げたき子細あり」と、云ふに十内詰寄つて、「イヤ若旦那今暫し、早まり給ふな只一言、申上げたき子細あり」と、云ふに十内詰寄つて、「イヤコレ畑介様、日頃よりの貞節義心、夫に引きかへ此場の有様、やうすなうては叶はぬ所、サアく其子細何とく」と問詰められ、「オ、其不審只今晴らす、鎖まつて聞いて呉れ」と、云ふより早く刀を抜き、左のあばらがはと突立て聲震はし、「非義非道を働いて、君を欺き奉り、御手にかよる其子細、一通り申上けん。忠臣無二の紙崎が、弟とは生れたれど、若氣の至り身持放埒、兄主膳に勘當受け、所々方々と流浪の身の上、身にしむ秋も肌薄く、霜に臥し雪に立ち、何國を夫と身の佇み、飢に勞れて死なんす身と、成果てし其所に、仁木將監が逆意の様子、聞くと等しくお館へ驢付きし所に、逆賊の源藏が計ひとは、露程も思ひ寄らざる此畑介、やみくと欺られ、相摸川へ落行くは、仁木なりと心得て、比は宵闇猶更に、降りしきる春雨に、川水高き相摸川、渡りも絶えて水音も、さも物凄く更行く空、雨夜の星とひらめく松明、遠目に夫と竊ひ見て、コハ源藏が詞に違はず、仁木將監此道を、落來るぞと心に悦び、としや遅しと松

影に、身を潛め窺ふ所、大杉が追人と見え、險しく戰ふ其有様、時分はよしと川の面、水底を
 潛行き、馬に諸足切付くれば、たまりもあへず首掻切り、追人を遁れん其爲に、其儘首は水中
 へ、打込んで其場を遁れ、あれ是と見合す内、持氏卿にも御病死とや、力と頼む兄主膳も、御
 勘氣受けて行方知れず、時節を待つて歸參の願と、此鏡山へ尋ね登り、昔の好み十内が、情に
 依つて送くる月日、お二方の我をお頼み、エ、天の與へ、我忠節盡さんは、此時節と思へども、
 エ、口惜しきは其日を送るたつきととも、浪人者の相住居、お二方の御養育、何とせん角とせ
 んと、迫る貧苦の剛敵には、力とても弱り果て、思ひ付いたる占やさん、十内と云合せ、愚な
 人を欺し街り、盜賊よりも猶卑怯な、世渡りなして今日までも、心を盡す其折柄、今日はから
 ずも上使の女、コレ此小柄を我に見せ、相摸川の其一件、聞いたる時の我悔り、天日を戴きて、
 片時の内も立つべきや、切腹とても武士の業、主を殺せし世の大法、竹鋸の此身の科、兎や角
 と案じ煩ひ、せんずる所君を欺かり、御敵と成つて、御手討をせめてもの申譯と、扱こそ斯く
 は計らひし。知らぬ事とは云ひながらも、敵の術にふはと乗り、三代相恩の御主君を、敵と思
 ひ討ち奉り、一つの功は立てたりと、今までも悦びしが、思へば思ひ廻はす程、弓矢神にも見
 放され、よつく武運に盡果てし、此身の上」と先非を悔い、せぐり上げたる荒涙、五體を震ひ

身を打伏し、前後不覺に取亂す、理せめて哀れなり。始終を聞いて縫之介、「心切なる汝が忠節、感ずるに猶餘り有り。扱又汝が今の詞、よつく思ひ合するに、忠臣無二と心に頼みし、源藏こそは心得ね、其方を謀り君を失ひ奉りし、其逆賊は大杉源藏、此上は油斷ならず」と、不審の詞姫君も、共に涙の聲くもらせ、「知らぬ事とて我君の、早まり給ひし今の其身、いとをしさよ」と御歎き、十内も泣く目を拂ひ、「御幼少より身持放埒、御舍兄にも御勘當、此年月の御艱難、いつ花實とて咲かずして、惜しや盛りを散らすか」と、連三世の別れの涙、齒を喰ひしばかり伏沈む、歎きの内に一間より、「御用意よくば縫之介様、イザお腹召しませい」と、立出づる尾上の前、縫之介は差寄つて、「繪旨を失ひし其科人、我首討つて家の相續、偏に頼む」と首差延べ、思ひ詰めたる覺悟の體。「オ、潔い御覺悟、花の方様の御賢慮にて、お身代り首討てと、太刀取りかねし檢使の役目、主人尾上が名代として、心を盡し術を以て、先君の御敵を討じし、主の尾上が志立てよと有る、重きお主の尾上様の、御忠節を無にせじと、名聞の出世とも、譏らば譏れ名を捨てて、お志を立てたい爲」「オ、此親も最前は、冥利に耽る不所存者と、勘當せしに様子を聞き、安堵致せし身の大慶、御推量下さるべし」と、怒の涙引替へて、嬉し涙ぞ道理なる。日も黄昏の其時刻と、畑介が傍へ差寄つて、「此尾上が目利の身代、優にや

さしき縫之介様の御身代に、遅しき荒男の、畑介殿の首討つて實檢に入れ、大杉が逆意の工み見顯す、見出しの種の身代首、イザ是まで」と露散る光り、刃の下に畑介が、首は前にぞ落ちてけり。ハツとばかりに人々も、手向の一句表には、かねて合圖の尾上が迎ひ、首桶携へ入り來れば、「イザ此上は二方共、鎌倉へ御供して、大膳が方に奪取りたる、御繪旨を取戻し、再び御代に出し參らせん。恐れ有れど此乗物、時の用にはお赦し受け、お相興に召しませい」と、残る方なきはからひに、十内も氣色をかへ、「縫之介様御生害、御檢使の尾上殿、お役目御苦勞く」と、他人向なるおれそれに、首桶抱へ立出づる。聞きも及ばぬ女の檢使、惡びれもせずしづくくと、別れを告げて出で行く振、内は回向の俱涙、外は勇みの揃への行列、振出す手先徒若黨、跡に引添ふ打かけの、姿も見事女文字、古郷の晴は忠と義の、夜の錦や織替へし、花の身代世語に、残す女の鏡山、別れてこそは出でて行く。

大正十一年七月十五日印刷
大正十一年七月十八日發行

有朋堂文庫
淨瑠璃名作下
(非賣品)

編輯者

塚本哲三

印刷者兼發行

三浦理

印刷所

有朋堂印刷部

發行所

有朋堂書店

不許複製

東京市神田區錦町一丁目十九番地

東京市神田區錦町三丁目九番地

東京市神田區錦町一丁目十九番地

東京府下大久保町西大久保二百三十六番地

